部誌

高津高校
ハンドボール部

初優勝記念号

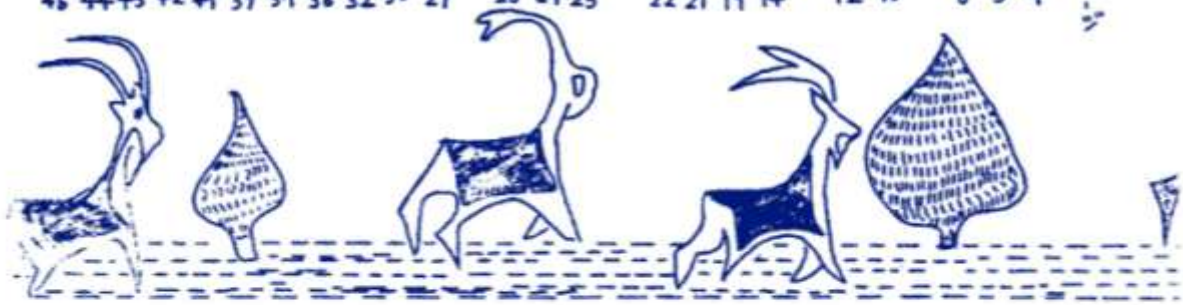
高津ハンドボール部

目次

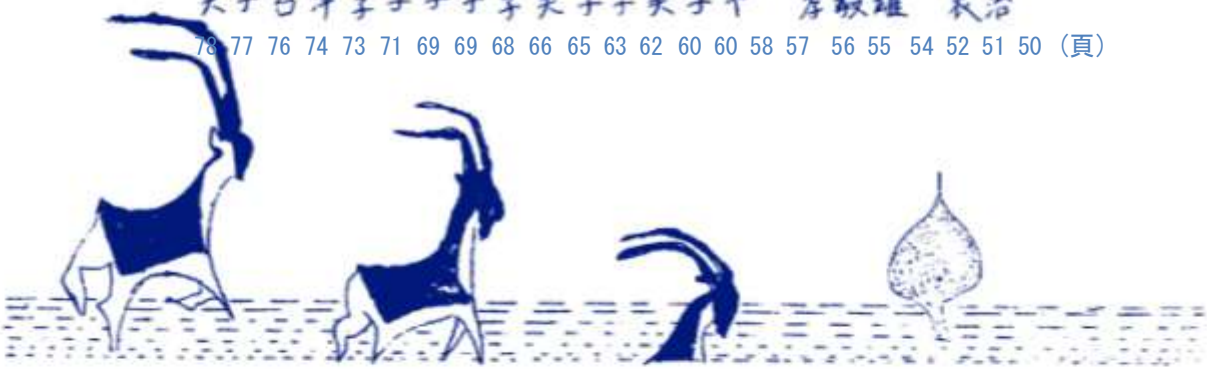
スポーツについて思うこと　校長　広川信夫　4
伝統　顧問　田中さや　5
送球　旧22期生　小西英博　8

男子の部

思い出すまゝ　3期生　橋本靖雄　10
試合　〃　佐々木蔵雄　12
高津クラブ近況　〃　〃　16
高津H日部泥中にある時　〃　〃　18
現役諸君の為につまらん話　〃　〃　23
敵もさるもの　〃　〃　14
楽しかったあの頃　〃　〃　19
私のハンドボール生活　〃　〃　25
無我の練習　〃　〃　26
手紙文　〃　〃　22
ハンドボールの味　〃　〃　26
活躍する高津クラブ勢　〃　〃　21
私のハンドボール丁　〃　〃　27
現役の時をふりかえる　〃　〃　23
五年一日　〃　〃　28
戦績　〃　〃　29
雑感　〃　〃　24
雑纂　〃　〃　31
勝利の女神　〃　〃　25
「和」「精神力」　〃　〃　33
若い思い出　13　〃　34
先輩と後輩　12　〃　29
我が無台を見て　11　〃　36
　　10　〃　38
　　〃　〃　39
　　〃　〃　41
　　〃　〃　43
　　〃　〃　44
　　〃　〃　45
　　〃　〃　46
　　〃　〃　48



感想　西本由治　50
反　一年代表　51
誘りとほこり　52
先輩　54
ハンドのラッパ　旧中忠雄　55
夢中だった現役時代　赫　毅　56
全日本室内大会を見て　上田　孝　57
女子の部
女子ハンドボール部の誕生　田中さや　58
雑　60
女子送球部の道　徳美恭子　60
ジャンプシュートの思い出　菊井清美　62
苦しかった思い出　井上晴子　63
ハンドボールで得たもの　浅野朝子　65
有意義なハンドボール生活　安田久美　66
我　績　安村かつ子　68
クラブで得た事　久保田順子　69
卒業にあたって　藤原芳子　69
私のクラブ生活　佐藤順子　71
ハンドボールと私　佐伯見淑子　73
感じたまま　西屋千洋　74
入部してクラブに入って　門田真弓　76
南部清子　77
編集後記　木下保美　78



スポーツについて思うこと

われ〳〵の学生時代には、球技と言えば、野球、庭球、サッカー、ラグビー位しかなく、今は、球技の種類も多くなり、学生諸君は、自分の身体と好みにあった、いろ〳〵の球技を選択できるので、その意味でも、今の学生諸君は恵まれていると言える。

ハンドボールは、どこの国で初められたものであるかしらないが、運動場も多く、ルールも極めて合理的に、又面白く定められていて、プレヤーの身体のあらゆる筋肉と、運動神経が鍛磨されるようになっている。高度のスポーツだと私は思う。私が高津に赴任してまもなく、グラウンドで練習を見ていると、今中先生が、「うちのハンドボール部は、勉強もよくできる子が多いですよ。」と語らしげに言ったことが記憶に残っている。

勉強や読書をすることが、青年の特権であるとともに、スポーツをやることも又青年の特権である。青年時代に、スポーツの厳しい練習をやって、身心を鍛えておかないような人は、社会に出ても、きびしい仕事には耐え難いことを、われ〳〵の経験が教えている。

今回、ハンド・ボール部誌が創刊されるそうであるが、これを機として、先輩後輩の連絡、協力が強化され、益々よき伝統を樹立し、部員が、科学的で、且きびしい練習をはげみ、ハンド・ボール部の発展を通して、高津高校の校風に、更に一段の光彩を添えて下さるよう、先輩並に部員諸君にお願いしておきたい。

山川 信夫

伝統

田中さや

此の度、ハンドボール部高津クラブの部誌創刊号が発行されました。

昭和二十四年私がお世話になった高津高校に入学させていただき、ハンドボールに出会い、思ってもみませんでした。

創設者の高津先生は三年生で、ハンドボール部の顧問でいらっしゃいました。

一人でも多くの優秀な選手を育てようと、当時の高津高校の体育科は非常に厳しかったです。

清水谷先生、森岡先生、現岡安先生は定年退職されましたが、現在も高津クラブの顧問として、ご指導いただいております。

高校時代、ハンドボールの練習は、盛んでした。

清水谷先生の講師としての厳しい目にさらされ、大変でした。

現城東高校に転勤された畑中先生、清水谷先生、岡本先生、現在の黒山先生は、ご外交流の講師となられ、自分の会社でお忙しくて無給の専任講師となられました。

高津クラブの部員は、何人かの十年余りの年間書き振り返ってみると、ずいぶんと遠くまで来たなあと思います。

これは一朝一夕に出来るものではありません。過去十余年間の皆々様の努力により造り上げられて来たクラブの伝統の良さ、即ち、高津の自主的な本当の良さが、クラブ発展の上にも発揮されたわけであります。

夏の合宿も創設当時のキャプテンの橋本さん等、社会人となられてからもタ方会社が済むとすぐに学校に来て、夕食后消灯時間までを利用して、ルールの研究や練習法についての話合い、朝は五時から出勤までの時間を利用しての コーチ等、寝る暇を惜しんでの指導の姿も何年間か見かけました。

女子のハンドボール部が、八期生の徳美さんや北野さん達の手によって創られる事になった年から私達 ハンドボール部と直接関係するようになりました。それ以来、辻今日までの間で最も印象深い思い出は、本陽子助さんをキャプテンとした昭和三十年の夏、楠木通りを中寺町に入ったお寺での合宿です。

その年の四月、高学に入学以来本格的なハンドボールの練習を始められた横本秀一郎さん、津田さんの両人を中心に、山中将可さん、岡部正文さん等多数の先輩によるコーチで、辻本・佐竹・金沢・大西・今村・小林・木下・吉川の二年生に、梶原・高田・神元・林の一年生を混えての合宿。

午前四時五十分、「オッキョーし」の津田さんの声に一斉に跳び起きる時から、一日の生活がはじまります。寝具の片付け、洗面、昇降部屋の掃除、ユニフォームに着換え、洗濯物をまとめて、シューズをはいて表の道路に並ぶわずか十分、そして午前五時、「つアイトレの掛け声と共に町に走り出し、体操数秒の駈足をして学校の運動場へ。

「だじゃれ」体操をしながら、馬跳・うさぎ跳等、が痛くなるようなことの多い早朝の練習です。

入部して日の浅い吉川君が、「カチ〈」になって、膝が震らんや林さんなくなったの脚はが、四日目ごろからでもしもひっこまなが固くなって、ッてッキンコンクリートのように固いので、ッてッテッキンコンクリートのようにれるいよ。うとにいなった所から、ニッキネーム呼ばッチンよ、五時半頃に始まり、現在の前田校長先生もテ見えにくなっていて、はいつもさまって運動場にあて努力していて、まがらない、足に手をみさえがンバレ！ンバレ！と声を掛けて励ましてあげたものです。

こうして七時半に第一回の練習を終えてから洗面、つづいて朝食、午前九時より、再び練習開始、十二時の昼食後は、教室や運動場の木陰等、それ〈涼しい所を求め

三時より第三回目の練習南始。
全期間中合宿を共に見える。
先輩は、次々と激励コーチが
先輩に、生徒達の練習ぶりを
同じ、下級生の練習ぶりを
数人の先輩も加わって、
六時頃にはあるいは
夕食をすませると、
食後、練習をしていた
ここの道程を一時間余り
ここのフォーム
ここのぼる。
ここの坂道を
ここの坂道を
ここの坂道を

服部（関学）・石崎（京大）・林（慶大）さんと現在も各大学で活躍している優秀な人々が多くあります。

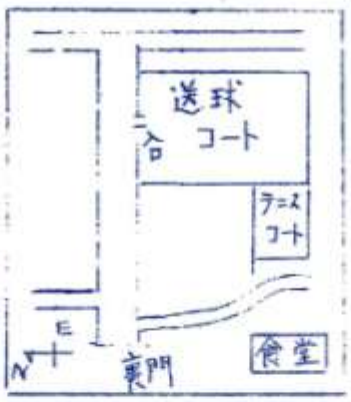
最近は城野さんにとても熱心に、毎日のように指導していただいて居りますが、今年は在学生の部員数が少ないので、一寸寂しい感じがします。十余年間の先輩方の努力によって築き上げられた立派な伝統を傷つけないように、いや、ますます発展・繁栄しますように現在の在学中の人々の努力を望むと共に、高津クラブ（O.B O.G）の隆盛をお祈り致します。

送球

小西 英博

ドリブル……パス……ドリブル……シュート……。グラウンドのはしからはしへ、一つのボールを追ってひたはしる。頭には体力と技術のあらん限りを出しつくしてボールと敵味方の動き以外は何もない。何十分間かの緊張と躍動とは青年の心をひさつけずにはおかない。ハンドボールクラブの依頼でこの文を草しつつ、心はその頃の、グラウンドを走りまわっている私の姿を追っているのを感じる。その頃―昭和十四年―は「送球」と言っていた。今日のハンドボールが日本へはいってきてまだ間のない頃であった。送球の祖国ドイツからチームが来日して親善試合をしたりしていた。当時の高津中学校は、時の校長羽生（はにゅう）隆先生の教育方針に副って、対外試合をする運動部は全くなく、そのかわり全校生徒が、バスケットボール、バレーボール、フットボール（サッカール）、テニス、送球という五つの種目のどれかに属して週一回、所定の曜日の放課後運動をすることになっていた。先生方もその中のどれかの指導に当たられた。一年は月曜日、

二年は火曜日というふうに学年ごとに曜日が決められ、五十分間、練習したり試合をしたりしたものだ。サッカーは現在のグラウンド、バレーはグラウンドの北寄りのコート、バスケットは体育館、テニスは食堂の東側、そして送球はその東側でおこなった。食堂の東側から、真田山公園西側を走る南北の道路にかけて、第二運動場があり、それが我々の送球コートであった。決められた日の第六時限がすむと、いっせいに体操の服装に着がえ、通学服を体操袋に入れて北館のグラウンドに面した壁につくられた袋かけに体操袋をかけ、当番がボールを持って全員第二運動場に集合、点呼、準備体操の後球技にうつるわけである。クラブではなく、すべて先生の指導によるものであるから、現在の諸君のように、自主的に練習計画をたてて練習し、練習が終ってからの語らいにクラブ員の親しさが密になるということはないが、それにしても、チームメートとしての親近感が全然ないわけではなかった。



当時は五月に、花園ラグビー場で運動会があった。これは、所謂運動会である。その後十月の末まで、先に書いたような方法で球技を練習し、十一月の、たしか一、二、三の三日間だったと記憶するが校内球技大会が行われ（勿論授業なし）、トーナメントでクラス対抗試合により優勝を決めた。送球にはバスケットにはバスケットと、それぞれに応援歌があり、試合当日、開始前と終了後に全員で歌い気勢をあげたものだ。その頃は一学年六クラスであって、一位から六位まで、順位によって得点が与えられ、五つの部門の得点を合計して総合優勝を決めた。クラス全員がどの部門かに必ず属していたせいもあって関心が強く、大会期間中は相当に興奮したものである。府立中学校も大部分は運動部を持ち、対外試合をし、全国大会等にも出場したりしていた中にあって、高津のこのやり方は特殊なものであった。新聞のスポーツ欄に名の出ることもなく、又、全員が選手だったから、技術的にはそう高度なものは望むべくもなかったが、ともするとかたよりがちな運動に、全員が参加するという、この方法は、それ自体一つの教育的見識をあらわすもので、相当高く評価されて然るべきも

のと思う。又、時代は徐々に、そして後には急速に軍国主義化国粋主義化し、外国の球技などするひまがあれば日本の武道をやれ、外国の球技をする奴は、外国かぶれの非国民であるというようだ。今から思えば滑稽ともみえ、さちがいじみているとさえ思える風潮の中にあって、昭和十八年頃までこのような球技をさせてくれた学校の態度には、顧みて無条件に感謝の念を持つ。母校卒業後の進学先でこのことを話したら、全国各地から来ていた友人たちは殆んど皆おどろきの声を発したほどであった。

久しぶりに回顧して、今さらのようになつかしさを覚える。今グラウンドを走りまわっている諸君も、いつかは私のように、今をふりかえってなつかしさをおぼえることであろう。その時期が充実したものであればあるだけ、ふりかえった時のなつかしさは大きく深い。今を充実したまえ。ボールを追って走る諸君の姿をみて、そのみなぎる若さ力強さに昏のほこりびを感じる。時代の明日をになう諸君のエネルギーに大きく期待する。

自分のシュートで優勝を決めたうれしさはいつになっても忘れられない、ひそかな喜びであり、ささやかな誇りでもある。

ハンドボール略史

ハンドボールをあまり（全然？）御存じでない校長先生の為に、またハンドボールをやっていながらその起源や歴史を御存じでない方々の為にハンドボール略史を書いてみたいと思います。

ハンドボールの起源は古代ギリシア、ローマ時代からである。当時ギリシアではハルパストーン、ハルパストウリと称するゲームがあり、ボールを奪い合って所定の位置に投げ込むゲームであった。これが今日のサッカー、ラグビー、ハンドボールの始まりと考えられる。ハンドボールの形をした球技は、一九五一年トーアバル（門球）という名称でドイツで女子体育興隆の意図の下に考案され、欧州諸国に普及するに及んで、男子にも次第に愛好されるに至った。現在のハンドボールはドイツのカール・シェ

レッによって創案された。そして一九二〇年にはベルリン体操連盟が正式のハンドボール規則を制定した。そして翌二十一年にはこの規則によって、全ドイツハンドボール選手権大会がハノーバで挙行された。これがハンドボール競技会の最初である。ついで一九三六年のベルリンオリンピック大会には正式種目として加入されドイツが優勝した。

日本では一九二二（大正11）年当時の東京高師（教育大）教授の大谷武一氏がドイツから紹介し、その後新教材として学校体操要目として採用された。スポーツとしては一九三七（昭和12）年第一回関東ハンドボール選手権が行なわれた。太平洋戦争中は、戦力即ちスポーツという思潮が当時台頭し、平和であるべきスポーツにも、その実施の制限があった事は悲しむべき事であった。それでもハンドボールは女子のスポーツとして制限外にわかれたが曲りなりにも継続していた程度で、思うほどに進展しないうちに終戦となった。一九四六（昭和21）年の春には早くも東西対抗を行い秋は復活第一回国民体育大会が大阪を中心に行なわれたが、ハンドボールも各種目別の東西対抗で参加した。以後年々盛んとなっている。しかし、ハンドボールはまだ〈一般によく認識されていない。野球のごとく、庭球のごとく多くの人々に親しまれていない。この事実を否定し得る時が一日も早く来るようにと我々は願っている。――

さて、我が高津ハンドボール部も創立以来十余年を数え、その活動も、常に活発にしてなごやか、社会に大学にと有能な人物を送り出して益々発展の途上にある。そこで、現役諸君に自らの立場を自覚し、今後のクラブ発展のために全力を傾注してもらう意図をもって、昔の思い出話などを綴って頂いた。

男子の部

三期生

思い出すまゝ

橋本 靖雄

私は高津ハンドボール部の創立は知らないが、過去と現在が大きく違う様に、当時の部員の状態の変じ、合宿等の憤えている事を記したいと思う。入部したのは中学二年の終りか三年だと思う。バレー・テニス・野球・バスケットへの入部者は多勢いたが、最上級五年で一チーム、四年一人、三年数名という程度だった。当時の主将は高山さんだったと思う。メンバーで記憶にある人は、五年に高山、黒田、橋本、堀内、四年に稲本、三年に塩谷、林、米田、和田、山田や吉村、そして私位である。やがて上級生が卒業し、三年の我々が主力として再建せねばならなくなった。林、塩谷両氏と力を合はせ、同じ学年の部員募集をして、一チームを作り、次の代に受け渡したのだった。当時の試合は、シニアーとジュニアーと二つに分けて行われた。シニアーは、四・五年を含んだチーム、ジュニアーは、三年以下のチームである。現在の新人大会のやうなものだ。戦績としては、最良の出来と思う。ジュニアー大会で準決勝迄行ったのが、延長で北野に敗れた。シニアーばあまり試合をしていない様子である。高一の時はすべての大会に参加したが、現在の様に参加料はとられないし、上級生が登録等もいらなかった。他チームは、二、三年ばかり、差戦するのが良いけれど、勝つことはまれであった。勝山校、高津に高一ばかり、組み易い相手があった。ここも勝った時には、高一ばかりでもこの三年の時には、勝つ様になった。協会でもこのチームは高三になれば、優勝と云われり負けたりする様になった。高津独特の学問改革の為、チームながら、高一へと変っていくのである。この習慣は、春の大会が引退試合で、チームの維持は出来ず、後々につづいてしまった。次に練習の様子である。我々には一人として卒業生のコーチは来てくれなかった。よだ中学生の時は近藤さん（当時は国学の現役一）が来て下さっていたが、この人が来られる時は少しわかったらしい。国学でも主将で相当やる人であったらしい。上級生と練習をしている時でも、一諸にレベルの位で、チームとしてはまとまった感じはなかった

・唯、試合前だけはチームらしい感じを受けた練習である。他校では卒業生が一チーム位来てくれるとか耳にするとくやしかったが致しかたなかった。当時の体育教官の岡本先生が、曙星川高女へ連れて行ってくれて、歯科大のコーチを受けさせてくれた。これが最初で、しばらく歯科大のコーチが続いたと思っている。高二の時教会の仕事をし、ハンドボールの村田先生が体育教官になられた。初めのうちは見てくださったが、我々も集りがわるくなり、だんだんみてくださらなくなり他校に転校されてそれ切り。先生に対して不平もあったが我々にも反省せねばならないところもあった。

高三になって高一の多数の入部を得た。一年下は少なく三名で、又、熱意のない様であったので期待せず、高一に希望を持ち、自分のふんだ苦しみを味わふことなく過させようと思ったが、後々は、部員でやはり少し苦労した様であった。又、物的にも恵まれていなかった。ボールにしてもだ破れたら自分で縫ったり、パンクすれば自転車屋へ行ってはったり、数も少なくそれだけ大切にしていた。例えばボールをけると、運動場を人より二回余分にまわるとかしたものであった。次に、一番苦しかったのは、合宿である。コーチはなし、付添の教官はなし、炊事も交代で行い、用意さえすめば皆と同じだけ練習、体重も減ったことは確かだ。筋肉は痛いし、寝るところは三階と来ている。階段で何度も休んで上った。苦しかっただけに印象深く残っている。次に、部屋の件にしてもある部は幸福な才で、最初は運動場で着がえていた。やっとのことでもらうと、戸をつけて鍵をつけねばならなかった。最大の被害は試合中にズボンを取られた。どこの学校もよくあったらしいが、我々は、まだ被害の少ない方であったらしい。ルール上に於いても変化している。オフサイドラインとラインアウトとだ。我々の最初は、直線でラインアウトはその場から笛で投げた。

卒業して十年もたった。部の後輩は我々より、よい戦績と、よりよい態度と立派になっていった。卒業生に対する礼儀も、他の部に比べると非常によく、嬉しくも誇らしくも思った。現役時代の苦しみは懐しく思いだされてきます。

最後により一層の発展と活躍を祈って居ります。

試合

佐々木 蔵雄

あれは昭和二十三年だから、我々は中学校の三年生であった。中学の三年といってもまだ現在のローティーンと違って、まだまだ戦時中の精神教育というものが浸み込んでいたから、その純粋さは失われていない。特に男女七才にして席を同じうせずという教えが身にしみて婦人は側へも寄せつけなかったものだけど。それにひきかえ後輩共はアーアー……。

それはさておき、当時は体育教官岡本氏の関係で大阪歯科大学のチームの方々が我々のコーチに来てくれたが当時の歯科大は黄金時代で全日でも有数のチームであった。その点我々は後輩の村田氏といい優秀なコーチ陣に恵まれて正に鬼に金棒。征く所敵なしとまではいかなくとも、まあまあの成績であった。その歯科大のコーチに寝屋川へ遠征した事があった。寝屋川はその当時から現在と変らず、ハンドボール界では鳴らしておったね。実さい、その動きといいシュートカといい敵にと、て不足なしのうまさを持っており我々も眼をならして敵地へ乗り込んだ。時はまさに昭和二十三年一月二十七日天気は快晴。少々の寒さは気にしないフォワードは敵陣へ雪崩れ込んだ。当時はゴールライン外側にオフサイドラインというのがあって攻撃側も守備側もゾーンの中で二十人もオールメンアタックなどいってさて攻めるには攻めたが婦人が両手を拡げて掴まえに来るのを左によけ右にかわしてはたまた守る方も掴みどころがないこなくてはいけないさいけれど掴みどころがない精神教育がたたって往左往する有様でありました。笑いかしてディフェンスにアタックの無反則の模範的試合が行われたのに紳士と淑女の試合が行われている。ちなみに翌年の学制改革によって男女共学の問題がおきた時には、高津とならば共学賛成といわしめた程でありました。残念な事には、区域外の清水谷と共学になった昭和二十四年九月三日の合同練習の予定は相手の都合で流れた。気を悪くしたのかな。当時の戦績を二三御披露申し上げます。

昭和二十三年
一月十七日　池田中学に遠征六対〇で向うの勝ち。

一月二十一日　天王寺中学に遠征二対一でこっちが敗れて次の対鳳中戦は三対二で向うの勝ち。

一月二十三日　本校に於て対住吉中戦は三対一で高津中の勝ち。

一月三十一日　八尾中へ遠征して四対二で向うの勝ち。

三月二十四日　千里山にて府下の新人戦は対戦校は不明だけれど二回戦三対二準決勝四対二で勝ち抜いて準決勝に進出。

三月二十七日　準決勝は五対〇で惜しくも敗れる。

昭和二十四年度

九月八日　寝屋川に遠征し、今度は男子とやって勝つ。

九月九日　因体予選が豊中で行われ両中の泥試合であったが勝つ。

九月十七日　藤井寺で二次戦は四対二で敗け。

昭和二十五年度

一月十八日　対勝山高三対六高津の勝ち。

一月三十一日　対山本高戦はスコアーは、は"きりしないが勝っているハズです。

もっと勝っているはずなのに負けた記録ばかり残っているのは勝つのがあたり前で勝った方はつけなかったようです。しかし此の頃は食量事情も悪るく田舎の米のメシを食っている奴とおかゆかいもという我々ではおのずとその差は、はっきりしているものね。生野高校、勝山高校、それに北野高校とは特に試合数が多かった様です。

格言

Hand Ball

KOZU

若者は欲しいと思う、恋と金と健康を。ところである日かれらはいう、健康と金と恋を。

ポール・ジェラルディー

青年よ、青年よ、つねに正義とともにあれ。もし正義の観念が汝のうちで薄れるようなことがあれば、汝があらゆる危険にみちいるだろう。

ゾラ

各人の中には、驚くべき可能性があるのだ。お前の力とお前の若さを信ぜよ。絶えず言い続ける事を忘れるな。つぼく次オでどうにでもなるのだ、と。

アンドレジード

幸福はまずなによりも健康のなかにある。

G・W・カーチス

高津クラブの近況

H氏

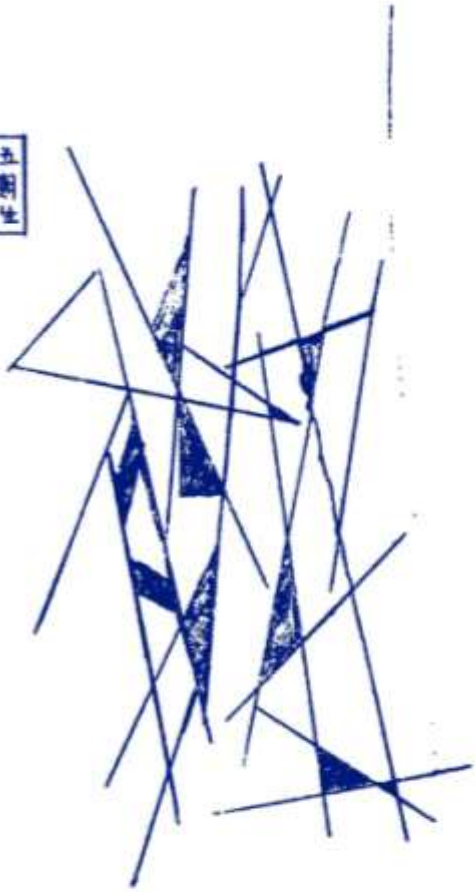
生れて以来十余年、部誌発行を企画する
など近年とみに充実の度を増している我高
津ハンドボールクラブも、先輩諸氏の長年
の苦労のかいあって、徐々ではあるが、日
本ハンドボール球界の"高津クラブ"を
目指し前進しつつある。そこで、最近
一年を中心とした我クラブの戦績を
ふりかえってみると、25年9月、
国体大阪予選(於豊中)
準決勝　対雪陵ク、8対7
決勝　対大阪ク、7対21
攻守共に善戦むなしく完敗
し、二位に止まる。25年12月
、大阪総合選手権
二回戦、対三国ヶ丘クラブ、
13対10で勝つ。これは優勝候補と
の対戦となり、白熱したシーソーゲー
ムを展開したが、堂々これを押し切る。
準決勝、対大阪府立大学　11対8
府大にはゴールキーパーに辻本(九期)、
高田(十期)のバックと両氏が出場してお
られ、我クラブ攻撃陣は非常にやりにくか
ったが着実に得点してゆき、危なげなく勝
利を納める。
決勝、対松ヶ枝クラブ　10対13
優勝を目前にしながら、ダークホースとし
て前評判がよく、その上、学生陣で固め練
習量の豊富さを誇る松ヶ枝クラブに勝ちを
さらわれる。残念無念!!
26年1月、大阪室内総合選手権
一回戦　不戦勝
二回戦　対寝屋川クラブ　13対4
高校主体であった寝屋川クラブを試合
巧者ぶりを発揮し問題なく軽く一蹴
してしまう。
準決勝　対松ヶ枝クラブ
8対13で負けろ。負傷者が
続出するなど悪条件も重な
り、又レベルでも松ヶ枝クラブ
の若さとチームワークの良さ
に苦渋を飲まされ無念の涙。大阪ク
決勝では我クラブの宿敵
ラブが優勝した。この大会に我クラ
ブは、以前は黄色のユニホーム及び白
地に袖と襟が黒のユニホームを共同使用
していたので、頼田先輩(五期)のデザイ
ン考案による、肩から腕にかけてライトブ
ルーの線の入った白い"モダーン"な新ユニ
ホーム、新しい白の半パンツ、白のストッ
キングとそろえて、登場したが、結局、

優

三位に止った。36年8月・練習試合
対丸紅飯田　7〈16−01〉1
で快勝。夏休みでもあり、我クラブとしては、ほとんど最強に近いメンバーで対抗。この大阪実業団の雄丸紅飯田に圧倒的勝利を納む。

36年11月　大阪総合選手権
二回戦　対三国ヶ丘クラブ
12〈39−56〉11　服部・石崎・浅野の三氏が用事で抜けていて現役（高校生）を使って人数をそろえようという苦しさだったが、中江氏の好リード辻本・高田氏の好プレーで辛勝。特に本来ゴールキーパーの辻本氏の名（迷）バックが光っていた。準決勝　対寝屋川クラブ
13〈25−75〉12　大学選手を中心にして固めた寝屋川クラブのチームワークの良さに最後まで悩まされ、タイムアップ一分前、浅野氏の豪快なシュートがゴール右すみに鮮やかに決まり、これまた辛勝。
決勝　対大阪クラブ　19〈10−87〉15
全日本級のそうくつたるメンバーを擁している大阪クラブに対し、我クラブは、若さとスピードで対抗。前半、開始よりリードし前半終了前と後半開始直後の速攻がさまり、後半には、一時七点差までに離した。その後、二点差までにつめよられたが、又、入れ返して、結局、一度も大阪クラブにリードされることなく四点差をもって初優勝となった。攻守両面に活躍の中江氏、強シュターの浅野氏を中心とするフォワード、巧守備のバック、ゴールキーパーと、若さで固ったチームワークの良さで遂に宿敵を倒し、多年の宿願が叶えられた。今年の国体でベストエイトに進むなど全国でも常に上位にランクされる大阪クラブを破ったことは我クラブのチーム力の向上を如実に示すものである。チーム結成以来、何度となく苦しさを、歩んで来られた先輩諸氏の御努力、いくやしさを、胸の中にしまい込んでやそれだけでなく、それらに基礎づけられた若さ力に対してもこの初優勝は、全く喜ばしいことである。「苦は楽の種」とはよくいったものだ。その通りである。我クラブの前途には洋々としたものがある。全国制覇も、まさに、そう遠い夢ではなくなった。その実力も着々と身につけられつつある。御期待あれ!!　（T・H記）

昭和三十六年十二月二十二日



五期生

故林氏、平山君に捧ぐ

〝高津ハンドボール部〟

泥中にあるとき〟

額田晃作

部史を作ると言う。クーポンのバンの時代、焼跡がまだあちこちにあった時代。ユニフォームは五彩、揃えようにもノーマネー、そして先輩等の作られた肌着をエビ茶に染めて白い衿をつけたのをゆずり受け、足りない者は適当なシャツを着てゲームをやった。この時代に部史を作る事等は考えもせず。たゞ橋本氏にシボられ強くなろう強くなろうと連日〈〈学校は五日制でも練習は七日制、それなのに勝つ事が少なかった。従がって暗い戦跡は早く同時に忘れようと思ってしまった。私としては惜しくはないが部から見れば厂史を自ら削った事になるかもしれない。お許しを乞う。

これから書くのは記録でなく思い出である。

私が送球部（当時はハンドボールと言うより送球という方が多かった）を始めて見たのは皮肉にも野球部が夏の甲子園に出場し初戦で破れたがその敢闘を祝って行なわれた O・B現役戦に父が後援会会長の手前出場するので観戦していた時である。当時は野球のネットが校長官舎の前に張られ、グラウンドも今の半分程でライトが校舎に接し、後に慶応、鐘紡と進んだ投手、四番の福沢氏がラビットボールの関係もあろうが校舎をポンく起した時代であった。ネットはその後、今のエ像の所に木造で大きなのが建てられ、グラウンドの拡張と共に今の場所に鉄製で建てられた。ネットの位置によくなると反比例して弱くなっている様に思われる。なぜ他部のネットの位置をくどくと述べたかというと、その位置によって狭かったグラウンドでの練習が朝日の移

の野球部の打球により我々の練習をおびやかされた事が忘れられないからである。恐りを生じた硬球が何人かに当っても大事に至らなかったのは神の加護？によるものである。

その9．B戦の時に見た、それも二人だけの練習を、鉄砲をした人がシュートしている。たゞそれだけであるが、今もはっきり目に浮ぶ。その人は多分橋本氏であろう。

尻の大きさで判かる。

年が変って高津へ入った。中学でやったサッカーをやるか、野球をやるか、で迷ったが手でやるサッカー即ち迷球という事で橋本君の進めで踏み切った。

悪い顔を無理して記憶を呼び起すという事はシンドイ、とにかく初陣は北野との練習試合でハーフライン、ストライクのシュートを打ちええ根性ちょっと無理ーと言われ敗れたが素晴しい充実感があった。

FW橋本、佐々木、乙岡、奥川、樽本、小生、B津田、箱田、井斗、合田、田原、K林、でありたと思うがこれでは数が合わないし、このメンバーなら敗ける事もないよ〜判らない。

兎角顧門の荒木先生が帰りにアイスキャンデーを喰べさせて下さった事はハッキリ覚えている。心臓、

練習は基本練習が主で当時程体力を作る事をやかましくいわれた時はなかった。事実、ゴールまで球の届かない人もいたし、一般に小柄で卒業してから伸び出した者がいたりして真に皮肉なものだ。蛙飛び、馬跳び、ワンツー、ドスン、ロングのランニング、もシンドイ奴ばかりだった。

私達のクラブは橋本氏あっていた。美丈夫紺の詰襟、七三の黒髪パラリ、眼力は正邪を見究め、体力は女房（女傑）とうたわれた逞しい桃太郎だ。一旋して射つ球は必ずキーパーの手に触れずネットをゆすぶる。ヤッサンが大学でやってたら全日本級は固かった。と後に佐々木氏が云われるが横成は全てで高津。でこそ秀逸しその様な余暇があったら散えと思う。

辛業後も指示されたコテンに月の光の練習を受けた。練習が清き、皆揃って校門を出る。家庭の事、一人（の事に後を使う。

ボールの空気を抜き、皆揃ってネットをはずして、

事、一人（の事に後を使う。

私もクラブのマネージメントは色々とやったがヤッサンのやった事が大きな教訓となっている。

誠実そのものの様なコーチを受け、愛くるしくなれなかったけれど、自分の生活の病床にドボールというものが溶け込むという

成り、又同病患者が多く出ていろのはヤッ
サンのカでおり、所為である。
一年生の合宿は二階の一番校門よりの部
屋で講堂の椅子を四つ組んでベッドにして
泊り、食事は食堂、風呂は焼けたうぶ湯と
書いた煙突を見ながらコチン／の足を
引きずって鶴橋の方へ入りにいった。後に
合宿でコーチをして貰った時、田山、空堀
上田、日赤の南、うぶ湯と入りに入お
ったが、うぶ湯が一番感じがよろしい。
やまけにうぶ湯のお嬢さんがハンドボール
ねる。因念というものでしょう。ルを
ると思い出すが、故平山君と私が渡辺君に
呂で思い出すが、故平山君お前まだか」
毛がないのを発見した。渡辺君も独特のお
まだやねんー平山君も渡辺君も中でウ
クッと笑いながら話していた。我々の
一番早く結婚したのが渡辺君で、一番早く
、亡くなったのが横重な平山君とは判らな
いものだ。
私が生まれて始めて生命の危険を感じた
のはこの合宿である。橋本、伯々木、乙田
、林、菊出、津田の三年生が息に見えた。
二年は興田、井斗、倉田、一年は樽本、平
山、田原、渡辺、上田、芝田で篠原君も入
っていたかも知れない。この時のヤッサン
の苦労は海千山千の同級生の扱いに手を焼
き、朝の練習をさぼって屋上で眠る林氏を

追いかけたり。七時間練習をなんとか短か
くしようとするのを丸めたり、神の如き存
在もコーチ兼キャプテンでは自分もノッ
反対ちに合わねばならず目を開いたまま眠り
ると言う位へばっていた。小生なぞは全員
が円陣を作って球を廻すのをアタッニング
という練習に合て、ロングのラッニング
ユートでは吐いてばかりいたが、一日
昏睡し後は何とかついていけた。二年生
そんな練習に耐えかねて駄目と
体力の差と馴れか駄目と
しばしオーバーフェンスをやるのに
威の目を見張った。中でも林氏の元気さは驚
特筆される。球がネットにかからでも底
るが、もうたくなられてから十年近くな
でぶい、たつアイト、芝田君をつかれて
砲ぶい練習をさせていた姿が目に浮れて砂場でん
に合った打は、回通のストがあったの最後
合へこの鉢巻を見せていた。ってい
慢完に赤鉢巻ざあれば入ってあける、と自組

一年生大会はその先輩達の期待にこたえる
る事が出来なかった。勝山通の一戦は今なら
ら中止のコンディションであるが当時は男
女とも晴雨不論がラグビー並に徹底していた
た。私のバンパーに当ってボテンと混中にストッ
プしたシュートをゴールジャッジの興田
氏が敢然たる態度で旗を挙げた、入ってな

かったね。相手も砲丸の様なボールを投かねてようやく一点、延長後こちらのバックがあって13米スローエリヤの中を走るという珍事がゴールのハーフタイム時のつぶやき！ショー奥田氏のパスがよう廻ってるしとの調子や！ほじくり出して帰ったリトの慰めで勝の右をほじくり出して帰ったよ。敗けても雨中戦は得意という自信が出来た。裏替えせば雨でないと相手のペースに揉回されるということだ。しかし雨中戦はパンツを二枚用意するか、Fye・K・Iのnでユニホームをつけるという偉大な真理を発見した。メンバーは下、樺本、早山、篠原、上田、木村、渡辺、額田、志村、森田、K、芝田、B、田原、であったろうか。当時はオフサイドラインがあった。こちらのFWがそのラインを敵側にはサッカーと同じで球がそのラインを越えないと、こちらのFWがその線を越えられないという、ベルリン問題みたいなルールであれば今程の陸上線で、あのまま逆ばそれられなかったと思われる。何人でもその後、ジャンプシュートが許され、何人と決められた。室内でもよかったのが六人と決められた。

出来たのは、榎本、津田君等の時代からで、それ迄は女子もフィールドオンリー！であった。フィールドのルール改正は、全て我々の現役時代に行なわれ、大いに面喰った。特にジャンプシュートはやった事が無く、倒れ込んで射ていたのだからお笑いである。二年の府民大会は一回戦不戦勝、二回戦雨中戦で勝ち予選を通過、藤井寺球場で入場式があった。五色のユニホームを着た小粒のチームがベスト8に残ったのだからよう勝って来たなーと隣のチームにひやかされたが、あれだけ練習したのだから当然の事だと思っていた。それがただ一輪の花といえようか。練習の厳しさに反して戦績は思わしくなかった。その所為もあってか部室もなく、道具は体育教官室（今の東体育館男子更衣室）の荒木先生の一番下の引出しを使わして頂いていた。即ち教官室が部室で、時には試合ハ翌日にボールを出すハを忘れ鍵がないので荒木先生宅に訪がって何時に持って来て下さいという一幕もあった。そういう事もあって今ハ部室が出来た時、一番先に黄った。それ迄は冬の雪が散らつく時、柳ハ根本の階段で着更えたが当時の研究生活の所為もあってそう苦にならなかったが、寒かったねえ。二年になると一度に寂しくなった。三年は奥田、井手、倉田、木村で合宿は我々二年と一年ハ井上君を加えた全くの新メンバーで行なわれた。顧問は鳴川先生でコーチは別ばやっさん、昼は林氏で昼は楽だったが、

ヤッさん人が稽めから帰ってからの夜間練習はキツかった。しかし陽がカンカンでないので助かったが隣室のパイの音は眠りにくかった。その後私がコーチを二、三人に絞り夫は特に注意し、コーチを二、三人に絞り後は通ってもらった。この頃は依然として五日制で練習試合をするのに恵まれ、豊中、北野、八尾、勝山、都島、勝てる所では山本、城南とよくやったが最初に一様な事情でスコアーは尿に書いた。合宿に三年生が参加しなくなった。時からクラブの実権は又年に移り、先輩の指示で樽本君がCAPになり私が会計になった。所が練習をリードしていたのは私だったのでなったが、樽本君は公式のみのCAPで私を自由に振舞わせた。今もよく同じ獣で乗る関係から逆、球八事を計すが、彼が大人であるのは今も変らない。所が樽本君のお父さんが亡くなられてクラブをやめる様になり11番樽本のポイントゲッターの穴は大きく、その後はサウスポーの北中君が入った。山中、井上両君はその頃はバックに入っていた。二年の終りか三年の始め、平山君が虫垂炎で入院した。森田君は餅を喰べると盲腸が痛むという説を唱えた。それ以後餅を喰べる毎に盲腸を押え、平山君を思い出す。閉学へ進んで腹膜炎か腸捻転で亡くなったのもこの虫垂炎に関係はなかったのではなかろうか。これで平山君をプレーから遠ざかりFWもガタつき出し、三年に入ると勉強ムードが流行し、清さ足だったグラブを加可ともしがたく。私はおまけに強んと無人の絵画部を任されたりして、合宿も行なわれず、井上、山中、北中、床田、島、京、岡部と三年八有志でクラブは動かされた。二年に移ってから井上君が、城南に試合を申し込んだがこちらの人類が足らず、試合が出来ないから断って異れないかという。そんなクラブを二年に任せた私に責任があるのは勿論で、三拝四拝してお引き取り願った。先輩が作ったクラブも、もはやニルまでかと思うと絵を書く筆も重かったがヤッさん流のクラブ経営法が成功してから絵画の方は日本一まで持っていけた。私は文化部と運動部と入って両立するかという問題にいつも勉強しないのならば両立すると答えている。いつか又弄をふくつぶれるのは時間の問題かと気をもんだハンドボールも、今や完全に足元が固まり、

熱戦ならずとも將来は真に明るい。KOZ
じゃラブは根本君等が卒業した年に作った
と覚えている。初代CAPに選ばれたもの
の大学でプレーせず絵ばかり描いていた私
には重荷で、ただハンドボールのおもしろ
さを再び味わせて頂いた。女子のクラブが
作られてすぐ三位になったりしたが、これ
は傑作であった。一度KOZ以クラブも優
勝戦で大阪クラブに敗れたが白紙入賞状を
貰い涙と小さく書き、優勝と大書して御礼
嫌な事もあった。今の隆盛はゲームの表面
的な戦績だけでなく、メンバー全体が充実
した生活をしている所にある。これはヤッ
さんを始めとする先輩の精神が後輩に受け
つがれ、中でも大学でプレーした人々が高
津の為に技術と精神を持ち帰ってくれたお
陰である。強チームには理論より体で示せ
るだけの力のあるコーチが必要である。こ
の恵まれた時が続く限り我々は安心して前
途を見守る事が出来る。又、オリンピック
に除外された陸会の政治的な弱さも、高津
の先輩によって強化され、スポーツ界に占
るハンドボールの地位がより高くなる事を
切に願うものである。

現役諸君の為に

つまらん話

上田 孝

"もう駄目だ、息もとまりそう"とても続かない。"何度も思いながらあえぎ〳〵練習していたあの頃、それでも結構やめられなかった日のことを明るく楽しい思い出として心に残している。ハンドボールについて、おそらく高津に入るまでは知らなかった。今でこそスポーツ全盛でその名も多少は聞えているがそれでもまだ〳〵。でもスポーツの種目なんて何でもいい。ハンドボールをやった為に身体も丈夫になり非常に有難いと思っている。

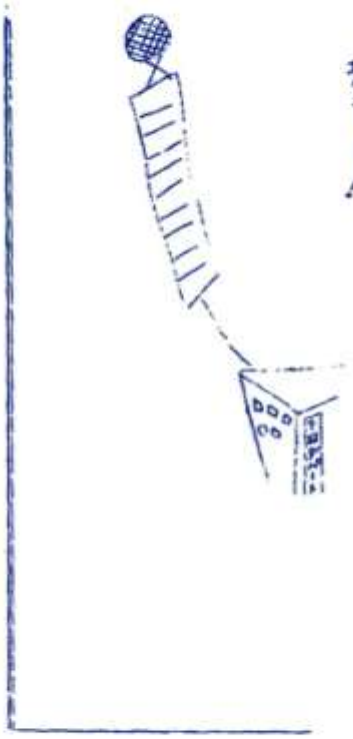
プロならいざ知らず、われ〳〵は一体何の為に金諸けにもならないことに汗をかいて苦しい思いをするのか、どういう楽しい結果が与えられるのか、試合に勝つことが喜びで、敗けることに悲しみなのか、体力を発散させることに快よさを味うのか、彼女に勇猛ぶりを見てもらいたいのか、ヒーローになりたいのか、理屈を云い出せばきりがないが、ケチな考えでスポーツをやるなら止めた方が身の為。清い気持でやっている奴が案外多い。スポーツ選手を売物にして、他人より優越感を得ようとか、般

女にもてようとか考えるのはモグリ選手。スポーツの偽物を身につけている人である。

オカワイソーニ。

判り切ったことだがスポーツをやるのは、自分自身の心と体を丈夫にする為、社会の荒波に打ち勝つだけのねばり強さを養う為、あっらかな気持で世渡りが出来る様になる為である。スポーツを見せ物にするのはプロにまかせてあればいい、試合に勝ち人にさわがれ、ヒーローになって浮かれるのも多いによろしい、でもいつまでも浮かれていて練習をおろそかにしない様に、がンバッテネ。幸いハンドボール選手にはモグリはあまり居ない様だ、あ世辞じゃないスポーツを見物にするならもっと世間に名の通った種目へ失礼だから例を上げないのが便利だろうから。ケチな考えでないのびくーやりましょう。理屈を云うよりまず走ること、走って疲れたら理屈を云う気もなくなる。〝もう駄目だ〟なんて考えてはいけない。

面白くも、愉快な話だが、何年か前、まだ藤井寺グランドがあった頃、試合前の挨拶に両チーム並んでいる時、つかーと横に出てジャーくー音高うかに立小便をした奴がいる。このにのもしいのはわが高津クラブ選手である。皆ゲラくー笑った。不



深な感じは全然なく試合前の気持をやわらげたのだから有難い。何か美しい、何かきたないと考えるよりよほど効果的である。この時の相手が天阪クラブ、何年でっこも勝てない相手だったが今年はとうくー念願をはたした。大阪クラブを敗って大阪大会に優勝したのである。目出たい事。試合に勝ったことよりもこれからも勝てる、もっともっと発展するんだという気持を持てることがうれしい。

私の好きな歌、皆の知ってる歌、なずい文章を長々と読むよりこの詩を深く理解する方が懸命である。

若者よ、体を鍛えておけ
美しい心がたくましい体にからくて
さっえられる日がいつかは来る
その日の為に、体を鍛えておけ
若者よ！

敵もさるもの

渡辺　巌

先日行われた大阪総合選手権の時、優勝戦を見せてもらい、我々の高津クラブで、ここまで成長したのかと今さらながらその発展ぶりに目をみはりました。体力と云い、私がハンドボールを手にしていた当時をふりかえって、非常に気はづかしい思いです。当時はまだ戦後の混乱からぬけきっていなかったので、都会の学生と地方のそれとでは、体力的にかく段の差があったものです。ことに食糧は、食い物が粗末なせいか、中学より成長が止っていた様で、学校中でも一、二番のチビでした。だから、部部つ学校と対戦する時は、さながら大人と子供が相撲をしているようなもので、とんでお話にならないありさまでした。

われもしません。豊中校と対戦した時でした。私の身長の二倍程ある相手が、目の前にさっとうして来ては私の頭上はるかからシュートして行くので、人一倍負けん気の強かった私はこれではいけないと、相手がシュートするしゅんかん手が上ったのですが、敵もさるもの、気配をさっして下からシュートされて、それを勝にそしもにあたったからたまりません、グーというなりその場に転倒してしまいました。

あれもこれも、今振り返って楽しく、そしてなつかしい思い出です。

クーベルタンの言葉

「オリンピック競技に於て最も重要な事は勝つ事ではなくて参加する事である。人生に於て最も大切なものは、成功する事ではなくて努力する事である。競技の核心をなすものは、単なる斗争ではなく正々堂々と競う事である。この心を銘記してこそ、より強き、より雄々しき、より慎重な、より多くある人間性を養う事ができる」

六期生

懐しかったあの頃

山口 将司

卒業以来最早七年余りの歳月を経た今日過ぎし日の事を思い出すことに大変な郷愁を感じると共に一抹の寂しさをも覚える様である。といえばは島津時代のクラブ活動がいかにつけ悪しきにつけ何でもなかったにせよ細々ながら当時の出来事の一コマ一コマが鮮明に私の脳裏に残り、今刻みこまれているというのは、やはり私共の時代は今日の隆盛にいたるまでの過程であり、クラブに於いて全く苦しい時代だったと云えます。私共は常に部員の不足に悩まされ先輩諸氏の熱心なる指導で練習はやり乍ら所謂体系的なものがなく草々しかった次第です。併しながら当時はやり乍らも所謂体系的なものがなく草々しかった次第です。併しながら当時は振り返ると淋しく寂しかったという一言に尽きる様です。この言葉で表現出来ない様な楽しさという事を現在の現役のクラブ員諸君にも感じて欲しいと思う訳です。私共同学年のクラブ員の高揚時代に演じた種々のエピソードを考え様と思うのですが文章にして表わす事が出来ない様に思います。この様なクラブ誌を作る事が出来るのはクラブが順調に発展している事を証明するに他ならぬ事だと思います。最後に立派な先輩を持ち又立派な伝統を受け継ぎ輝やかしい成果を挙げてくれる後輩諸氏に対して御礼を申し上げる次第です。

完

七期生

一九五二年九月～一九五五年三月

私のハンドボール生活

松田 一彦

始めに期間として一九五二年九月と書いた理由は、私が九月よりハンドボール部に入ったからだ。同期生の内、院に私よりも前に入っていたのは、後に関学大に進み現在丸善石油に勤務している榎本君、同じ大学に進み現在は津田鋼材にいる宮崎君、途中三年生で止めた大和証券の広田君であった。私が九月に入って約一週間位の練習で初めて対外試合があった。対生野高校である。その頃私は初めてのうろうろとフォードの一人として線数を摘えていた様な印象としてのみ記憶している。当時のフォードは、二年山中和泉北中、一年横本私田であったと思う。結局対生野高校試合の成績は五－二位で敗れた。其の後一～二試合対外試合をしたと思うが、記憶が明確でないので省略するが印象深くされているのは一年大会での成績である。

第一回戦は山本高校との試合であるが、それまでに確か不戦勝が一つあったと記憶している。山本高校には簡単に勝ち、次の試合は三嶋野高校であった。この試合も大勝であったと思う。此の試合に勝って準決勝に進出したが岡高校であったと思うが敗れてしまった。しかし府下[illegible]に進出した事は当時の部の意気を少なからず高揚したものだ。この時の一年生大会では最初メンバーを整えるのに苦労した。後に関学のレギュラーキーパーとして全日本大会にも活躍し全国制覇を成しとげた津田君はこの時から入部することになったのも誠に面白い事だが彼は一年大会では[illegible]として参加している。因みにこの大会では現在あまり顔を見せないが同期の向では未だ未だ記憶に留められている中西君鍵君等がキーパーとして活躍した。同じ年新人大会でもたしか[illegible]に残り、次の大会からシード校として組合わせに残った事がある。当時の意気は誠に高らかで同期の堀尾君の[illegible]で岸和田高校に遠征した事がある。当時岸和田高校と云えば常勝豊中高校と肩を並べる程の強豪で我々は大いに[illegible]を以て同[illegible]と当った。試合は前半後半共シーソーゲームで残り一くニ分迄一点を争う試合であったが結局六ー五で惜敗したが岸和田高校も我々の健斗を讃えてくれたものだ。其の後八尾高校等と二三回戦グランドにて対抗試合をしたのだがこれらは全部勝利を治め府下高校大会では常に[illegible]として上位進出を期待されていたものだ。この頃七人制ハンドボールが日本にも紹介され大会もこの七人制が府立体育館にて屡々催される様になった。この頃より三年生に入り所謂高津の伝統で大学受験という名目で部の種々の事務等を二年生の宮山君丸山君西田君等の後輩に受継いだ。尚参考迄に一年生と二年生の前半迄は濃紺のジャージ後二年生の間のジャージに変えたがこのジャージの色決定で皆の意見が喰違い結局は[illegible]に決定する迄大分時間がかかったのを思い出す。

八期生

無我の練習

西田武彦

どうも御無沙汰を重ねて居ります。小生の方は元気に仕事をしています。目下仕事は相似形電子計算機作り。会社は昭和電子KKという日立の子会社。住居は独身寮で会社のすぐそば。ところは東京の国分

寺、武蔵野の面影が残っているところです。高津のハンドボール部の思い出では山中、榎本、松田、長田力などの諸兄等に手ほどきを受け、我々の二年のときから再刑された合宿で榎本さんや津田さんにしごかれ、ハーハーいわされたのを覚えています。親田兄等には春夏秋冬ズーと三階の窓からオイコラといわれていました。

成績といっても何も覚えていませんがいつでしたか、くじの都合で気が付いたら大阪のベストフォーに入っていて、榎本さん達と喜こんだ事を覚えています。今にして思えば小生の学生生活の中でハンドボールの占めた割合が大きかった事に気が付きます。一時はハンドボールが生活であったこともあります。現在の日常生活に於いても小生の日々を支えてくれるのは高津で学んだ物の考え方と高津から飛躍へとつながったハンドボールがグウンドを中心として小生にたっぷりこんでくれた精神力であると確信をもっていえます。現役の諸君は唯ア本になって練習される事をお願いします。当地に居ては高津の諸兄にめったに逢もあわすことがありません。おついでの時はお立寄り下さい。

完

元財生

手紙文

佐竹 貞夫

浅野君、たびたびのお手紙どうもすみません、仕事が想像以上に多忙で原稿を書く暇もないんです。とにかく毎日残業で終電車さしばしば。自宅を出勤です。大阪本社では輸出量が一番多い人絹スフの船積を度々部下のかたがたと共に手伝ってるんです。大変です。入社してまだ一年たちませんが一人前以上の事をたたきこまれつつ言ってます。これほど残業が続いてもへこたれないのは、やはり高校時代のスパルタ式練習のあの陰と思っています。野球なんかも一度位顔を出さねばと思っています。どうせ野球がなくて強くなってるんですが、こんなわけで同期の幹事はどうやらつとまりそうにないから、味の素に入った辻本君にやってもらえませんか。

今度初めてオレンジスをもらったんですが、日頃何ら面倒もみれなかったおわびに少額ですが、部の為に使って下さい。中旬は少し余裕ができますが、月末は初めは徹夜も辞さぬ位の忙しさです。電話室も直用円も安宅の佐竹と言ってそう云えば下さればわかりますから、で一度声をかけて下さい。

ハンドボールの味

辻本陽之助

私が初めてハンドボールに関係を持ったのは高等学校一年の時でしたが、そのきっかけは、私の友人が先輩の丸山氏を知っていましたので入学後一週間程して丸山氏が「一寸ハンドボールやってみないか、何時でもよいから」と云う部員勧誘の常套手段で誘われ、ついふらふらと入部したのでした。それから現在まで七年間、私もハンドボールと切っても切れない縁を持つ様になったのですが、考えて見ると今ではハンドボールは「タバコ」の様に一度味を覚えるとなかなかやめられぬものの様です。しばらく感じる事なのですが、合宿などで猛練習している時、もうハンドボールの練習はやりたくないと思う事があります。それでも一ヶ月程練習しないと、したくてたまらない気持になります。やはり私もハンドボールの虫なのでしょう。

私が初めてハンドボールの試合に出してもらったのは入部後一ヶ月程して、相手校は確か桜塚高校だったと思いますが、あの雨が降れば、パンツまで土色に染まる藤井寺球技場での試合でしたが、その時私のポジションはハーフバックとして公式戦に出たのはこの時一回きりで、その後ずっとゴールの門番をおゝせつかり、ゴールエリアの外へ出してもらえませんでした。私が現役の頃の部員の面々はと云えば、先ずマネジャーの佐竹君、彼はバックをやっていた精進型で運動場を余計に一周走着替えるのが遅いので一緒に帰ったのが、よくよく相手に絶対ボールを取られないアオワードの金沢君、それに突進型で時には退場を命ぜられた大西君。又バックの今村君は私達が三年の時、このクス陣がたくさんいる時に、「戦に勝てば西日本大会に行けると来て負けた事があり、我軍のバックは少なくとも市立工芸高校、生野高校ぐらいで大阪府下高校室内ハンドボール中

ましたが、先代「ブリキ」の小林君等の面々で橋君、皆夫々特徴のある人達でした。

私が主将をしていた当時の戦績を少し申し上げてみますと、必ずいただきの相手校でしたが、

会でベストフォアになった事がありました。又当時強かった高校は豊中高校、住吉高校だったと思います。室内ハンドボールと云えば、私には忘れられない、大変にがい経験があります。というのは、ある室内ハンドボール大会の準々決勝、対淀川高校との試合で接戦となり、延長でも勝負が決らず、遂に抽選する事になりました。そこで私はトスをやりそれに勝ったのはよかったのですが、トスに勝ったので先にくじを引くとそれがなんと負けくじで、とうとうそのの試合に負けた事がありました。その時本当にハンドボールにも判定勝というものがあったらなあとつくづく思い泣くに泣けない気持でした。又こうも思いました、ハンドボールのキャプテンは運の強いものがならんといかんなあと。私運がやってしいた頃の練習は週に四回程でしたが、しかし練習内容はかなりきついものでした。特に合宿等には当時関学でハンドボールをやっておられた榎本、津田両氏がよく来て下さって色々と新しい本格的な練習を受けました。私が今でも覚えている練習は、両足を紐でしばられキーパーのジャンプの練習をさされた事です。この様な練習を受けていた時など先輩と云うのは恐いなあと特に御大橋本氏が来られた時には皆競々として

いたものですが、しかし卒業してみると今度は先輩と云うのは有難いものでした。私が現役の頃の思い出をしたものでなどと勝手な考えの中で書き忘れてはならない事が他にも一つあります。それは「女子ハンドボール部の創設」であります。それは女子ハンドボール部は男女仲よくやって、他校のハンドボール部のうらやましがって見ているのに、我々が指をくわえてそれをうらやましがって見ているのはどうもつまらんと云うので、それでは早速作ろうと田中先生、先輩諸氏と我々で部員を勧誘して正式に作ったのでした。当初私と同期の佐竹君等と女子ハンドボール部一期の北野氏、徳見氏、菊井氏、吉川氏その他数名の人達を誘って作ったのですが、初めのうちは後々迄続くかなと思っていたのですが、今日では皆様の尽力で立派に成長しつつあるのを見るにつけ私達も大変うれしく思っている次第です。個人的な事ですが、私も今年で七年間続けて来た現役としてのハンドボール生活とも別れ、今後ハンドボールをやる事もほとんどありませんが、なんとか高津クラブを通じてハンドボールとのつながりを持ちたいと思っております。

皆様、今後共よろしく御願いします。

一九六一年十二月十四日
(陽)

活躍する高津クラブ勢

一度ハンドボールの味を覚えると、それが何か麻薬でもあるかのように、二度と忘れられないものとなるだろう。誰かがこういっていたのを覚えている。多くの人が、その味、あのスポーツの、あのハンドボールの味を忘れかねてか、現在も大学で、いやそれだけでなく、社会に出てもなおやっておられる。高津卒業後も続けてやっていかれる方が多いのも、まことにハンドボールは忘れられぬ、よきスポーツであるからこそである。先年、関学において模範的なづけるものがある。津田両氏が全日本学生王座選手権等で活躍した。うなづけるものがある。津田両氏が全日本学生王座選手権等で活躍した。

ある。去る二月（36年）第四回世界ハンドボール室内選手権大会出場の日本選抜チームの壮行試合に、大阪選抜チームの一員として、我クラブより中江、茂野両氏が出場された。善戦奮闘、日本選抜チームをもう一歩でくだすという所まで追いこんだ。スコアが17対16、これが示すように全くもって好試合を展開した。又、東西学生選抜ハンドボール選手権でも西軍チームに、昨年（35年）は、中江、石崎、茂野の三氏が選ばれて出場され、今年は、中江、服部、茂野の三氏が出場。昨年19対17、今年14対10で共に西軍が勝った。西軍に加わられた各氏の健闘はみごとなものであった。関西リーグ（学生）戦においても我高津

勢の活躍は目をみはるものがあり、中江氏を擁する同志社大学は、中江氏の攻守の活躍にの下に、秋期リーグ戦で優勝した。学生王座選手権では、慶浦工業大学に18対13で惜敗した。関学では、榎本、津田両氏卒業後、バックに服部氏の活躍がある。京大では、バックスの重鎮であり新主将となった石崎氏、それに関西ハンドボール球界きっての強シューター、彼がいなければ京大の現状維持は難しいといわれる程の浅野氏。今年入ったサ口氏。大阪府立大学では、名キーパーの辻本氏、ハーフバックセンターの高田氏、そして土井氏、市大では白井氏、小林氏、大産大には倉橋氏、林氏。又、卒業して後に新しく高津クラブに入った人、高校で途中退部した人を含むには、阪大三田氏、神戸大の高田氏、大阪大の川崎氏、安田氏等各校で活躍しておられる。特に中江、浅野両氏は京都クラブにも属しておられ、全日本(総合選)手権室内選手権等、各種の大会で気を吐かれた。又、今年度の関西学生ハンドボール連盟において中江氏が委員長、服部氏が副委員長の職をなしとげられた。今年は辻本(味の素)、中江(朝日新聞社)、高田(不二電機)服部(五十嵐電機)等が卒業されるが、来年度も石崎、浅野、両氏等を中心とする高津勢は活躍するだろう。そのたびに、高津クラブも繁栄の道をたどるのである。

(T・H記)

1961・12・23

十期生

私のハンドボール歴

中江　義雄

私のハンド・ボール歴をふりかえってみると、「本当によくまあ」あきずに七年間もの長い年月ハンドボールに没頭したものだ」と自分自身恐ろしく思われるのである。即ちその七年間という長い年月をハンドボールにお世話になった事によって他の人々と比較して何か今後社会生活を行っていく上に於て、対等に生活をもしかすると送ることが出来ないのではなかろうか。ということである。しかし私は反対にハンドボールにたずさわった事により最も社会生活を送る上に大切な、強い責任感・豊かな協調性の確立、強靭な体力、を身につけたと信じている。今後も一社会人となる運命にある我身をこのかけがえのない体験をもって立派に送らせたく思っています。さて、私の高津での三年間（実際には二年間かもしれないが）のハンドボール生活は今思うと少し物足りないものでありました。即ち、もう少し練習に打ち込んでいたら、今現在まで高津ハンドボール部が達成することの出来なかったインタハイ・国体出場を成し遂げていたように思う。十数人の部員は試合前の数日間の練習のみで事足りるように考えていた。何か趣味的な、いわゆる〃お遊び練習〃であった。全く口惜しいことをしたものである。後輩の皆様はこのような失敗を起すことなく、一度先輩[illegible]々の悲願のインタハイの出場校を獲得してほしい。

このような事情からか、大学に入ってからもハンドボールを続けている。今この原稿を書いている時は、現在リーグ戦の四日目を終って帰って来て書いていますが、次の週は難敵関学である。我々高津の先輩が悲願としているインタハイ出場と同様。私の属する同志社の先輩も、関学を窮地まで追いつめながら秋のリーグには一度も勝っていない。しかし今年こそは、自分の最後のハンドボール生活を飾るために優勝したく思っている。今まで大方の大試合には、自慢ではないが出場した。しかし一つこの学生王座には出場をしていない。その原因は〃伝統〃という壁を破ることが出来ない為である。し

かし、必ず今年こそ下級生を引っぱって、その伝統の力を打ち破ることが出来ると信じている。

主潮生

現役の時をふりかえる

石崎 寿夫

高校卒業から、はや三年目となりました。正確に言えば三年生の三分の二はハンドボールとは縁を切っておりましたから、その方で教えると三年はたっぷりすぎています。今も学生生活を続けている関係か、特に自分に変化があったとも感じることなく、勿論、人間的に成長を遂げたなどとはモ頭中されず、どうしても高校生活の延長といった気分で日々を過しています。ハンドボールも大学に入って又始めましたし、生活に特別な変化もなかったものですから、高校ハンドボール部時代をなつかしむこと、大してありませんでした。けれども、今、当時をふりかえって、部員連中のことなど思いおこすとき、先輩のこと、又、きれぎれの記憶、そのムードとしてもいったものだけがうかんできるにすぎず、ほんの三年が僅にとっては長い年月であったと、つくづく感じられます。人間は苦しい思い出は忘れるか、又は美化されて記憶にとどめられると言いますが、一年生当時、嫌でたまらなかった練習の苦しさ、さぶかった時のうれしさ、二年生になりキャプテンになった時からは、部員がまとめていくのに強引とも思えるほどの両立問題で悩み、あるいは退部したりするのをまのあたりにし、今となっては、ばマネージメント的苦労も、あるいは、遠足の思い出と変るところありませんが、生来、個人的、非外交的、思く言えばんあ利己的な僕がキャプテンの任務をつとめるのも、谷口君を初めとする創学年の連中をはじめ、下級生の援助があればこそでした。

谷口君と僕とは中学時代の同級生でしたし、クラブに加入したのも殆んどいっしょでしたし、高校に入ったのですから、宿命的にいうかと、心臓病を患い、キーパーの重責を時代の顔役たる僕は、復に背負わされたのも偶然です。その他、有能な中学部隊を大量にスカウトし、下級生ハンドボール大部隊の礎を築きましたし、その功績は大なるものがあります。その後、高畑、浅野、倉橋といった連中が続々入部し、浅野、現在やめ、中西のですが、その中西はその後副主将の任につき、倉橋は歯科大、高畑は早稲田大学に進学し、以上の連中が第一期の後に進学しました。

メンバーとすると、春休み以前から入部して三年生前期まで活躍した連中に、田中、杉浦、穂西、上田といった選手がいました。この年以来と思いますが、春休みに右記の以外に松浦を加え、新入生に期待をかけ、七人の小人数で山中先輩と共に合宿した時は、お互い遠慮気兼もいらない同級生ばかりでまとまった楽しい合宿が出来たものです。大体僕らの学年が入部が遅れたため、相対的にも際立った者がみらず、個性あふれた意気盛んな上級生と下級生の間にあり、強引にチームをリードする者もみらず、みとなしすぎるきらいがあったようです。勿論、現在にも、高校生時代の純情さを持ち続けているかどうかは保証の限りではありませんが、当時は、僕は勿論無口でおとなしい真面目一方な生徒で現在に及んでおり、穂西もおっとりした好人物で、受婦溢ればかりでありたし、谷口もユーモア解する文学青年であり、杉浦はごく平凡な明朗な部員で、まともな方に属しました。上田は体力にめぐまれ、運動万能で、ミスター男性のような風貌でしたが、善良な性格の持主で、これといった上でリードもないようです。こうして書いているうちに段々記憶がよみがえってきます。おとなしい一方のような連中も、それぞれ一くせある個性の持ち主だったと訂正しなければならないかも知れません。

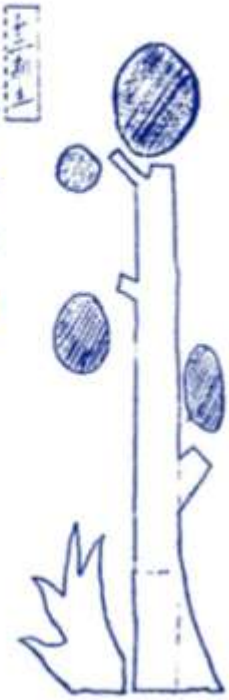
二年生に進級し、三年生と一年の間にあり友に練習し、対外試合を行い、そのうちに三年生も引退するに及んで、まとまりも良くなり、技術面もぐんぐん進歩し、二年の終り頃から三年生初めまでには他校と比し劣るところないバックスが出来たようです。二年生口をとしてバックスでした。特に運動能力にすぐれ、運動神経に恵まれない者が多かったのが、あれほど進歩したのですから、今、思い出しても嬉しいものです。回顧の念に耐えません。今すぐにも集り、消息をかわしたい気持がします。

B級にも余り劣ってはいないようですが、同期生同志はもちろん、先輩方後輩諸君とも、堅密にしたいものです。穂西は慶応でヨット、上田は関学でスキーと、多忙な生活ですが、是非一度会合して、昔変わらぬ純情を確めたいものです。

われらが先輩、後輩諸氏に、高津高校ハンドボール部卒業生の範たる十一期生の面々を紹介して筆を置きます。

手前味噌ばかり申し上げまして、お耳障りの方には、深くおわび申し上げる次第です。

―終り―



五年一日

浅野 和郎

「小生は、高校生活三年にして四つの誤りを犯した。一つは、読書の習慣をつけられなかった事であり、一つは、記念祭で一度も劇に出演しなかった事であり、又一つは、二度恋をしようが孤独、今一つは、のろわしいハンドをした事である。此の中二つは既に過去の出来事であり、二つは未来へと続く道の入口のようである。道は多分此のまゝの状態で、某る大学生活を支配することになろうが……。これは、大学入試の発表を待つ卒業約二週間後の日記の書き出しである。所謂がらく、ぶらりんの不安定な期間にしては、まずは冷静な観察である。

高校入学当初ボクは運動よりも文化活動に参加しようとさえ思っていた。そんなボクがハンドボール部員として部室に入るのを許され、希望に胸をふくらませたのもつかのま。勉学、余暇、運動との板ばさみにあいて、たちまち考えこんでしまった。夏のきびしかった合宿を経て、兵庫県でその名も高かった三田高校が遠征して来て、夢やぶれている内にいつか勝ってしまい、今までにない不思議な気持をあじわった。又、ボクの其の後の方向を決定した一つの要素は、二学期に行われた体力測定だった。当時バスケットとは対抗意識が強かったせいか、ハンドの者が走ったり投げたりする時には、二、三年生が休み時間に伴走してくれたり声をかけてくれた。そのせいもあって、五十メートル走りとバービーテストを除いて一級になれた。西さんや中江さんは五十メートル走りが大抜群、又とかき田とかきいてびっくりしたり、総合的にはバスケットには勝っているとかいったり、いやはや、ハンドボールが天下を取ったかのような騒ぎだった。

このようにして次第にハンドボールがじわじわと共に技術も向上し、一年の終りから二年の初めまでには、三田、北野、豊中、池田と五本の指に数えられるようになっていた。こうなると、考えこんでなどいられないのが人情で、二年の冬三田から、ほゞ一年ぶりに新人大会杯をとるまで、毎日ハンドボールの明け暮れだった。中江さんが一年の最

辺へピテカン）とマンツーマンで衝突し頬にかみつかれ、大きなばんそうこうを顔一面にはっている写真が残っているが、その時の練習は、なにか殺気が感じられたような気がする。その後、府民大会で優勝し、近畿大会で和歌山へ行ったが三位で兵庫工に一点差でやぶれ、三年の全日と国体には稲城と三国に王位をゆずってしまった。つぎ前年の内であと五人、あほがみつかったらインターハイも望みがあるのに」とよく中江さんが言われたが、ひょっとしたらと思うのは、ひいきめだろうか。

西原は、三年の冬の室内にも出場したが、あとの者は早くば五月に、遅くとも九月にはやめていたと思う。なにせ大学へまで行ってハンドをやっているあほはボクだけなのだから、もって推測すべしである。もっとはと言えば、ハンドがボクをあほにしたのである。ボクにしても中学生時分は文化性の高い少年だったのに！！！！！

「うらみてあまりある――」といいたい所だが、実際云って、現在ボクはあまり後悔はしていない。高校の部に入る時には別に一大決心したわけではないが、去年今年と果敢対抗にも出してもらい、最早来るところまで来たという感じで一杯である。いきがかり上、大学生活あと二年昨日のごとくハンドを続けていくことだろうが、今となっては泣いても笑ってもボクからハンドをとったら何も残らないのだから、ボクの文化的素質には目をつぶって、一度王座でもねらってやろうかと大志をいだく事は、あながち罪でもあるまい。

戦績

林　毅

昭和33年6月　全国高校選手权府予選
一回戦　対堺工高　12対3
二回戦　対北野高　10対18

昭和33年9月　日体府予選
一回戦　対都島工　21対7
二回戦　対桜塚高　12対13　延長惜敗

練習試合
六月　対泉陽高　12対1
八月　対東住吉　14対3

九月　対八尾高　15対4
〃　対平陽高　26対6
昭和33年　〃　8対4
〃　14対3

昭和33年11月　地区別新人大会
対豊中高　14対8　リーグ戦
対桜塚高　8対7　（四校）
対池田高　14対3　全勝

昭和33年12月　高校室内ハンド府大会
一回戦　不戦勝

昭和34年2月　大阪府新人大会
二回戦　対北野高　2対4
一回戦　対住吉高　19対7
二回戦　対佐野工　10対2

三回戦　対豊中高　8対7
準決勝　対桜塚高　11対6
決勝　対三国丘　12対9　優勝

昭和34年4月　府民体育大会地区予選
対ネヤ川　11対6
対北野高　11対3
対春日丘　10対4
対八尾高　15対6
府体決勝大会トーナメント

準決勝　対豊中高　17対4
決勝　対三国丘　17対11
（優勝　大阪第一代表進む大会会場）

近畿高校選手权（和歌山）
対和歌山商高　16対10
対奈良育英高　14対8
対県立兵庫工　9対10　惜敗

準決勝（この結果第3位）

昭和34年6月　全国高校選手权府予選
一回戦　不戦勝（シード）
二回戦　対堺工高　8（26 11 12）3
三回戦　対泉陽高　17（8 9 11 4 5）9
準決勝　対八尾高　15（26 11 5 6）11
決勝　対三国丘　8（62 11 27）9
↳二位

昭和34年9月 日体府予選
一回戦 不戦勝（シード）
準決勝 対泉大津 16対13
三回戦 対泉陽高 11対6
二回戦 対三島高 9対6
準決勝 対桜塚高 10〜55 11 47）11

練習試合
8月 対北野高 9対5
対八尾高 15対8
11月 対ネヤ川 6〜24 11 51）11

昭和34年11月 対桜塚地区別新人大会リーグ戦
対池田高 6〜33 11 33）6
対淀高 4〜33 11 32）5
対北の高 12対3
対豊中高 12対11
昭和34年12月 高校室内ハンド府大会
準決勝 対ネヤ川 9〜54 11 73）10 ↳3位
一回戦 対泉陽高 11対6
対天王寺 15対4
二回戦 対三島丘 14〜49 11 51）6
準決勝 対三島丘 14〜49 11 51）6
三回戦 対桜塚高 9〜63 11 37）10
決勝 対桜塚高 残念！二位
昭和35年4月 府民体育大会地区予選

雑感

渡辺 青顕

「部史」の大切な数頁を汚す様で申し訳ないが、何か気軽に書いてくれとの事、思いつくまま手の動くまま書いてみる。

今年（36年度）3月に13期生として高津を去って、現在天下の素浪人の身、さらそ

昭和35年5月 府体決勝トーナメント
一回戦 不戦勝
二回戦 対三島丘 11対8
準決勝 対西野田工 4対10
三位決定 対泉陽 11対9
一次阪神三代表として過ぎ大会出場
（全勝で決勝トーナメント出場権獲得）
再試合 対北の高 7〜25 11 33）6
〃 〃 11〜39 11 44）8
対ネヤ川 9対39
対生野高 18対4
対春日丘 16対9

準々決勝 対京都洛星 19（9〜16 10 10）10
高校選手権 対奈良育英 4（22 11 14）5
一回戦
練習試合 四月

以上

うな事は言えないが）これ程ハンドボールが懐しく思った事がない。現役中、練習が辛い時にサボル様な不心得をしたり、いわば私の部生活は何と中途半端な面が多く、たのではないか、成績が悪いのを両親はハンドボールをしているからだと考え、何度も退部する様にいわれたが、私は絶対退部せず終りまでずっとやった。もっとも、私自身、頭の悪い事は知っていたのでは無いというのはハンドボールのせいではないと言う事る十分承知していたのではあるが）今から考えると退部しなかったことが今更ながら良かったと思われる。しかし、本音を吐くと一年生の時、即ち入部した頃の私は、今まで二十米さえも走れない体力の持ち主であった。この体で浅野氏、西原氏等のモノスゴイ体力の持主と同等に練習する事、これは私にとって筆舌に尽し難い（少しオーバーかな）重労働だった。家に帰るのがやっと、勉強等は到底出来ません。又翌日、痛い足をひきづって登校、こういった生活が毎日続いた。だが夏の強化合宿が終ってから、不思議と以前とは全く異った体が出来た自分を見つけた。その一年生の時の初めての合宿これは昼飯が食べられない位つらかった。だが七日間の合宿に倒れずやれた事で私の体に少しばかり「俺も人並にやれるぞ！」という自信が胎動し始めた。それ以来というもの、ハンドボールが楽しくてたまらなくなった。いや、ハンドボールが好きになったのでした。二年の時、ブレイングマネージャーをしたのも私のハンドボール部に於ける想い出といえば言えるでしょう。

高津を卒業した人で何のクラブ活動もやっていなかった人は、「俺は高津で三年間何をして来たんやろう。」と必ずいいます。だが私にはハンドボールがあったのです。今でもあの時、もっと練習していれば、この時もっと頑張ればよかったのにと思う日が時々あります。それほど私にはハンドボールと切っても切れない高津高校の生活が生きいきと胸の中に生きているのです。先日テレビで中江氏服部氏の出ていた試合の実況があって、それを見ていると、無性にハンドボールがしたくなった。が、私の様に体のない者にはムリだと思って今ではあきらめている。ただ高津での苦しかったけれども楽しかった合宿・練習・試合の想い出を静かに胸に秘めて……。

—ピチカン—

雑纂

井口邦男

部史を作るから何か書けと浅野さんに強迫されて、何を書いていいのか分らず、大いに弱りながら過去の戦績や部の盛衰など、多くの先輩が歩んで来た道から教訓と自信、高津ハンドボール部員であることの喜びと誇りを学びとって欲しいと思います。しかし私がこれから書こうとしている事は部史に関係があるかどうかも疑しい事なので、書くのも本当に気がひけますが、ほんの一年でも在部していた者の感想と思い出だと思って頂ければ幸いです。

私は現在大学でもハンドをやっていますが、此のスポーツとの因縁を思う時、つくづくいつも人の世の不思議さを感じないではおれません。高津に入学したものの、時は運動クラブに入ることなど考えもしませんでした。読書と勉強、これが私の信条でした。その私が勉強と運動を両立させてやろうということでしょうか。殊勝な決心をしたものの話をした時のようでもあり、クラスメートの中でも彼は魅力的な人柄で、皆の親しみが感じられる人気者であった。話ぶりにも成績も大変優秀で、教えてもらいたいと相手に会ったのが中藤君であった。彼が上京する時、現在の高津に入学するにあたって、彼は知人の紹介で生涯の友を得たのである。私がハンドボールを始めたのは、それ以来、彼は退部するまで、私は退部した直後であった。私にとって、彼の存在は、何時の日か、彼に追いつき、追い越すことを目標にしてきたのである。

私が退部したのは、今思うとこれも不思議な縁であった。ハンドボールを受けたのは、ほんの練習にすぎなかったが、今になってみると、それらの練習は、単純なスポーツマンに限らず、スポーツ一般に通じる勝つための練習であったのである。

に囚われない、単純で率直な性格が養われるのかもしれません。私は或るやむにやまれぬ事情で一年間しかハンドが出来ず、従って高校時代はスポーツマンたり得る事もできませんでしたが、大学生である現在、学問の修得を目指す真摯な学徒であると同時に、純真でたくましいスポーツマンたり得ようと努力しております。

さて思い出となると、数学と単語に痛めつけられた頭では僅か三年前の出来事さえも思い出せないのでしょうか。記憶に残っているのはたった一度の夏の合宿の事だけで、その思い出さえもはるか彼方に霞んでしまい、苦しかったという感覚だけが残っているにすぎません。その合宿が、いまだかつて苦しい鍛練を経験していなかった私に、苦しさとはこういうものだと教え示してくれたのでした。そういう意味では、その合宿中きついしぼり方をされた榎本さんをはじめとする多数の先輩に感謝すべきだと思っております。それにしても、榎本さんの練習中の言葉使いの荒さや、しぼり方のきつさには度肝をぬかれました。一年生同志お互いに陰でヒソヒソ話をしてはウップンを晴らしたようにも記憶します。また朝の寝覚めを快く感じたのは第一日目の朝だけで、楽しみは寝る事と食べる事だけでした。中にはメシも食べたくないというものが大分おりましたが、こと私に関する限りは、ボールを受け損うことは、しばしばでしたが、体重が減ったと皆が言う中で、私の体重がふえたのも、そのおかげかもしれません。先輩の誰かが、合宿で体重がふえるのは平素あまりいいものを食べていないという証拠だと言われたのを聞いて、そんなものかなと思ったりもしました。しかし、合宿が終りに近づくにつれて体重が減る一方であったのはいうまでもありません。今年の夏の合宿には、私も先輩の一人として参加させてもらいましたが、現役諸君が激しい練習に耐えているのを見ても、あの頃はもっときつかったと思えて仕方がありませんでした。実際は大した違いはないのでしょうが、そこが時の流れの偉大さで、あいまいになった記憶に懐古の情が加ってそう思えたのでしょう。とにかく練習は苦しい。その苦しい練習を経てこそ勝利がより一層感動的なものとなるのです。傍そうな事をいうようですが、現役諸君の奮闘を期待してやみません。向う所敵なしの無敵の高津が勝利の栄冠を手にする事を祈りつつ私はペンを置きたいと思います。

Victory always goes to the strong.

'41.11.22.

勝利の女神

青木　英俊

近頃は新入部員の数に困らぬそうで今年などは大勢いると聞く。小生らが入学した年は、いや毎年の行事かも知れないが、合格と同時に上級生等が鵜の目、鷹の目で目ぼしい人間を手当り次第に勧誘していた。しかし、小生が如き者にまで及んできたのだから、数さえそろえればよいのかなとさえ思った位だった。入部した当時は新部員が少なくて、基礎練習ではみっちりと可愛いがられて悪臭放つ部室のしきいが増々高くなるのを痛感したものだった。練習もフォーメーションになると、文字通りのボール拾い、ゴールの後ろでもっぱら声を張りあげて先輩諸氏の動きを観察した(つ)もので、ひ弱な、やせた軀の小生は、もっと体格がよければ活躍してやるのにと思ったものだった。試合、確か府民大会の時だったろうか、春日丘高迄いった時、これが高津の強さの程を自分にしらせてくれた試合の最初のものであった。北野高に軽く一蹴された試合であった。しかし、先輩の指導により、さくさくと上達した我ハンドボール部が、何度目かの全盛期を迎えるのは周知のところである。夏が盛りになる頃、合宿でしぼり上げられる。覚悟はしてるものの、息もつけない程たて続けに、炎天下でシボラレタのはこたえた。しかし、さすがに、合宿が済むと効能がでてきたのか、動きやすくなった。合宿後の試合に負けてはなるもんかという気持が他の時より余計したものである。時移り、三十四年春たけなわの頃、格別なる指導者、願田、甘江両氏の名コーチの手引きと、新三年生の手腕とチームワークの良さが、皇太子殿下御結婚奉祝と銘うった第十三回大阪府民体育祭において、我高津ハンドボール部に優勝杯をもたらしたのである。波に乗った高津ハンドは第二回近畿大会大阪予選においても桜塚高、三国ヶ丘高をものともせず第一位を獲得し、三国ヶ丘高と共に和歌山へ遠征、この近畿大会においても準決勝まで順調に歩を進めた

戎高津の前に強敵兵庫県立工業高校が現われ、シーソーゲームを繰りひろげ、勝利は掌中に落ちたかと思われたが、勝利の女神は戎高津に微笑まず、惜敗した。しかし、小生に一番あざやかに残っている試合は、いったん引退していた三年生まで繰りだして戦ったその年の全日本高校選手権大阪予選の決勝、相手はしぶとい三国ヶ丘高、まさに宿敵というべし。梅雨も明け、初夏の陽にわかに消え、曇って、車軸を流す様な雨、あわや試合は流れるかと思われたが、一時間以上も降った雨はピタッと止み、レフリーの ホイッスルは鳴った。しかし、ぬかるんだ地はスパイクを用なしにした。三国ヶ丘は意地の汚ないプレースローを繰りかえし、ペースを乱した。時間は残り少なくなるが、一点の差で追う。フォワードのシュートもバーにばかり当る。時間ばかり気になった。しかし、遂にタイムアップを宣するホイッスルがなった。全身の緊張は解け心身ともにがっくりしたものであった。こうして振りかえってみると部史の何分の一かに参与しただけであるが、意義深いものがあった様に思う。スポーツを楽しむつもりで入部したのが何時の間にか鍛錬されていた。最後に、高津のハンドでなく、ハンドの高津を離脱されん事を期す。

三年生

和 『精神力』

松倉 建樹

部誌創刊おめでとうございます。創刊号に寄稿できるというのは僕にとって最大の喜びあり、且つ高校三年間のうち数少ない想い出の一つとして心に残る事と思っています。この機関誌を通じて、高津ハンドボールの技術向上を、いやもっと大切な事である先輩諸兄姉と現役部員との間をもっと緊密に、即ち、人間的、社会的にも「和」を達成することが、この部誌の役割だと信じます。そこで創刊号に寄稿するにあたり、僕は、「和」について、又、それに付随して、「精神力」ということについて少し書いてみた。「和」即ち「チームワーク」である。これ程、言行一致の難しい言葉はそう多くあるまい。「チームワーク」というものがいかに大切であるかということは衆知のことである。僕は主将をしていた関係上、より一層心にこびりついている。この原因には、二つあると思う。まず、第一に一年が二年に、二年が三年に頼りすぎていることである。何事につけてもそうである。例えば、少しきつい練習の翌日等、「今日は体の調子が悪いから」という

ですぐ練習をさぼる！まだ主将に報告する者はいい方である。ひどいのは、無断で休むというのが大部分である。このように自己の行動に対して責任感がないことがそうである。高津ハンドボールの特徴の一つとして、主将は毎年二年生が担当している。これは二年生が三年生に対して"頼る"ということをなくし責任感をもたせるということが一つのねらいであると思う。だから一年生の諸君も、自分の占めている位置を自覚し、即ち、義務を果すよう努めてほしい。第二に、三年生にあると思う。クラブ内での行動が下級生に対してどのような影響をおよぼすかということを考えたことがあるだろうか。ここで二度反省すべきだと思う。いくら技術がすぐれていてもチームワークがなければ、絶対といっていいほど、大事なところでボロを出すものだ。だから、僕も高校生活は後3ヶ月しかないが、少しでもクラブのチームワークに対して援助するつもりである。現役諸君も早く自覚してくれることを望みます。次に、"精神力"について少し書いておこうと思う。最近の傾向として非常に精神力が弱くなっていると感じられる。恒例の春夏合宿練習をみてもわかると思う。あえてこの紙面に書かなくてもわかると思うから割愛する。今までに一番それが心にしみたのは近畿大会の時である。35年度は奈良県育英高校、36年度は同じく奈良県添上高校に一回戦で敗れたのだ。技術面では絶対に劣っていないのに敗れ去った。何故か。精神力が弱い事である。即ち、根性敗けをしたのだ。僕は残念でたまらない。今言いている時にもその時の様子が頭に浮んでくる。このような悪い悪循環、くりかえしは早く打ち切って、来年度にはぜひ勝ち進んでもらいたい。クラブと共に部員の発展を期して筆を置きたいと思う。――終り――

苦い思い出

前田 宏之

部史の一頁にのせられるかと思うと、どんなことを書いていいのかわからない。ライトフルバックが私にとって一番の思い出がある。それは一年生の六月に行われた全日予選がはじめての試合であった。松倉と二人で、二・三年の方に混じってかたくなったかもしれないが、一生懸命やった。

この三年間へ正味二年半）いろいろなことがあった中でも、合宿というもので、一年の合宿であったか、途中で盲腸になった者もいて、大変苦しかった練習であったに

しろ。今ではいい思い出である。中江さんや服部さんらにコーチしてもらい一週間、朝は早くから日の暮れまで練習、そしてうぶ湯で汗を流し、日に〳〵体重が減って行くのである。その結果であろう九月の国体予選には決勝で桜塚と大接戦を演じ、試合終了前に一点をゆるしそのまま勝利をゆがめたのが残念でたまらなかった。

試合に勝ったら次も勝とうと思ってファイトを燃やす。そして心に何かあるものを感じる。それは確かにその通りで、それは何か一種の優越感、満足感かも知れないがはっきり言い切ることは出来ない。又試合に敗れたその後のなんともいえない気持、汗臭い暗い部室で部会を開き、あってもなかったこうでもなかったと反省して、これからの練習などの予定をたてる。

団体プレーだけに人との和が大へん必要で、そのために苦しい合宿も皆といっしょにするのであろう。個人プレーより団結して組織との連絡がいつも中心で人につい

ていくことは大変むづかしく、なまやさしいものではないことを知ったのは、二年生の時だった。

先輩の練習中における思出は、いつまでもプラスすることは確かである。この三年間、晴れた日もあり、雨の日も又雪の日もあった。だけど一度も優勝しないで二位、三位といつもくやしい涙をのんでいるのであったのが残念だ。

あとから読み返すと何がなんだかわからないが要するにハンドボールをしたことによってこれからの生活などに何らかの形でプラスすることであろうと私は思う。

これから、このクラブ機関誌を通じて先輩と私達が、ハンドボールクラブを今以上にもりあげて行きたいものだ。

二年生

先輩と後輩

松村　圭造

僕がクラブに入ったのは、合格発表のあった三月二十日だった。今から考えると全くはずかしいことであるが、中学時代にはインドゲッターとして、マキャプテンとし活躍できたといううぬぼれが、一度に大胆にし、合格発表を知ると同時に入部して、丁度その時は合宿中だったので、合宿してる部屋まで行ってボールを借りて一人シュートを楽しんでいた。二十三日に始めて練習した。練習を中学当時のように甘く考えていた僕にとって、その時の激しい練習はとても耐えがたかった。始めてのしかも準備体操の前の運動場五周のランニングで

ほとんどのびてしまった。小さい僕にとってあのスピードはダッシュしてるのと変らなかったし、運動場五周という距離は、ちょっとしたマラソンだった。シュートノックの苦しかったこと。僕は加減してもらったから辛うじてついて行けたが、それでもその後二三日は動けなかった。

とにかくその時の練習を見て、又、その一部を経験して一度に自信を失った。とてもこれから先こんな練習に耐えて行けないと思った。そして、フラフラしていて六月の始めまではほとんど練習しなかった。しかし、近畿大会後三年生の引退した後から又練習を始めた。

僕の初試合は泉大津とだった。この試合はとても印象的だが、試合の事など他の諸君が詳しく述べてくれているので、僕は主にクラブについて述べてみよう。

一年生のうちは、とにかくクラブはけむたかった。特に田舎者の僕は、言葉使いも礼儀もしらない。始終先輩に対する態度がなってないと注意された。又、ホワードも僕一人が一年ですごくやりにくかった。部会がある毎にこごとばかりを並べられる。クラブはもっと楽しいはずなのに……

僕達一年生ばかりよく帰り道などで、先輩や二三年生の人をけなしたり、又はげましあったりした。これは一年の番の頃話には役立ったけれども、二年生との間に溝ができ、クラブとしてはまずかった。良かったと思うことは、こんな話をした後でいつも決まって、僕達がクラブをやって行く時はこうしようとか、又あのようにしようとか夢のような計画をしたことだ。

一九六一年二月九日、僕にとって思いがけない大事件が起った。元来さぼりであった僕のような者が、この日の部会でキャプテンに選ばれた。もちろん僕には全然自信がなかった。しかし幸運な事に、この後のクラブは非常に充実していたし、鈴木や西本などのような協力もあり、キャプテンをさせられた。四月、一年生が十人ほど入ってきた。夢のようなあの計画を少しでも実現させたかった。近畿大会も終り三年生がクラブから手をひいた五月、その後からクラブは今までと相変らずなかった。去年までは、あれほどけむたかった部室も、昼休みでも、十分の休憩時でも必ず自然と集っていた。ボール当番も毎日、一年生はよくやってくれた。今までの冗談なんて部室でほとんど聞けなかったのに、今では部室はまるで冗談やしゃれの言う所のように、すごく明かるく、楽しく、にぎやかだ。クラブもまとまっていた。というのも、一年と二年

との間にほとんど溝がなく、一年は二年に何でも遠慮なく言えるからであろう。これは良い事か、悪い事かは言いゆれない。しかし僕は、強いクラブより楽しいクラブを第一とする。

今年の一年生は、僕達一年生の時以上に先輩をけむたがる。毎年〳〵そういう傾向にあるのではないだろうか。毎年〳〵生意気に理屈っぽくなって来てるのではないだろうか。だん〳〵クラブの運営がむづかしくなってくる。勉強時間と練習時間のバランス、先輩と我々現役との関係や練習のやり方、時代のづれに生じてくる考えの違い、色々と問題はたくさんあるが僕は僕なりで、色々と考えているが、ここで述べることはひかえておく。理屈っぽくなるからである。

我が舞台を見て

鈴木 栄太郎

入部以来十日の四月十七日に本校で行われた対生野高校戦で後半、増田さんに代ってキーパーに入ったのが、僕の初めての試合経験である。見るのは小さい頃から三国丘高校でよく見たものだが、実際自分でやったのは始めて。余りドキドキはしなかったが、それでも現在の桃にはゆかず、前半増田さんが零点で押さえておられたのを、後半四点を献上してしまった。しかし自分ではまず〳〵の出来であった。後、府下大会は準決勝まで進み、辛うじて近畿大会出場権を獲得。しかしその近畿大会でも高槻ハンドボール部最大の敵である"雨"に出くわした悪条件と、林さん人の負傷で、奈良代表育英高校に無念の涙をのんだ。後にも述べるが、その翌年の三十六年近畿大会でも雨であったことや、奈良代表に苦汁をなめさせられたことを考えて見ると、我が校は、近畿大会に見放された、が無きにしもあらずである。とにかく三十七年度はいかにしてもこのジンクスを破ると共に、三度奈良県代表と相まみえたいと願っている。以後全日、国体予選とも二回戦で退敗。松倉さん、前田さん、田中さん、住吉さん、山口さん、福田さん、松村、西本、今村、岩瀬、黒岡、鈴木で来るべき地区大会に備えて練習に励んだ。その結果、十一月下旬、寝屋川高校に於て行われた地区大会では、寝屋川を引分け、再試合の末11-9で勝った事は、今まで一番うれしかったことであった。地区大会後、インドアシーズンを迎えた。これは我々一年生にとっては、初めての経験で大いにまごついたが、特に

ジャンプシュート！トは鼻の先からシュートされるようで止めようがない。この室内大会に備えて冬休みを返上して練習し、丁度時間を同じくして一般男子の室内大会も行われたので先輩達と合同練習であって我々は勉強ができた。室内大会では東住吉を11－5で破ったまではよかったが、桜塚には7－10と、相撲にたとえれば7送り出しをくった。完敗であった。後にも先にも1点差で破れた記録はないように思う。さてこの室内大会で一年間のスケジュールは大体消化されたのであるが、次に僕自身のこの一年間をふり返ってみよう。入部した当初は、丁度試合期間中だったので、側らで基礎練とボール拾いばかりやらされた。ちょっと休憩していると、林さんの声が飛んで来てサボルこともできない。「ハンドボールは文字どおりハンドボールであるはずなのにこんなことばっかりやっていてもえゝんかいな」という様な疑問はなくもなかったが、皆が恐い一心で練習に励んだ。そうこうしている内に中江さんがコーチに来られ、あっさりとキーパーに指名された。それ以後ずっと五月末までキーパーを務めたわけである。いよいよ四月、新部員も迎え先に加えた奥村、三木両君と共に戦力を増し、陣容は今迄になく充実し、府下大会、近畿大会に突入した。府下大会予選では、春日丘を13－10、牛野を7－6、寝屋川を延長の末11－9で破ったが、この頃で一番の苦戦だった。寝屋川戦程緊迫した好ゲームはなかった様に思う。思い出に残る試合であった。この結果府下大会に出場し、東住吉に破れはしたが豊中を15－13の接戦の末これを降し遂に近畿大会に出場する事となった。近畿大会当日、日本晴れの上天気でグランドコンディションも上々といったのだが、あいにく前日の雨でグランドは水たまり、あまりにあかしな旅館に泊らされたためすっかりコンディションが狂ってしまい、むなしく奈良県代表橿原高校の軍門に降った。この試合を最後に三年生は引退、以後新メンバーで臨む事になった。その陣容は、二年七人、一年六人、木ワード六人（桜村、西本、今村以上二年、橋本、船木、北岡）バック六人（岩瀬、三木、富岡、鈴木以上二年、佐藤）キーパー服部、これまでの戦歴等を述べたのだが、まとめてみると三十五年六月十二日に行われた対泉大津戦から、三十六年十一月一日に行われた対泉大二軍戦迄、十二勝十二敗一引分け、勝率五割というあまりかんばしくない成績であるが、今後がんばってください！勝率を上げ、高津ハンドボール部の歴史を飾ずかしめ

ない様に心掛けるつもりだ。最後にハンドボール部はチームプレーであるから、部員一人一人の好きかってな行動音動を慎まなければ勝利は有り得ないということを言って、この文の結びとしたい。

反感

西本　由治

私は高校時代に何か一つのクラブ活動に打ち込もうと決心した。元来、私は腕を強くしたかったから、手でボールを扱うハンドボールに決めた。そんなさいしょの目的でハンドボールをすることにした。が、今から考えるとそれは、全くかけ離れた夢であった。

そう、一年の夏の合宿の時、私はあんまり二年生にこき使われるので、合宿後の練習は一度も行かなかった。食事の用意、後かたずけ、ボールの手入れ、室のそうじ、この他色々の用をさいれた。私は家においても、ビシにおいても、一度だって人に使われた事がなかった。だからよけいに腹が立ってしかたがなかった。合宿だから一年も二年もお互いに苦しい。二年は一年生の時一度経験したから、二年生が何でもしてくれてもよさそうなものだ。毎日〈、しんどいからみんな動くことがおっくうがちなのに、二年生は癖ながら一年生にあいせい、こうせいといっていいつけるばかりで、自分たちは少しも動こうとしない。だから一年生はよってたかって文句ばかりいっていた。いつもそんな事になると、私が一番先に感情を爆発させて、二年生にたてついた者だった。そんなに文句があるのなら自分でしろ」と。

いつだったか、こんな事も考えた。一年生だけで高津ハンドボール第二軍を作ろうと。ギーパー、バック、ホワードも一年だけでできるので。そしたら今の二年生の奴らどんな顔しよるやろ。そうか、二年生の奴らおいだしてしまおう。（まだそれは晩秋の時であった。たが〉一年生だけでクラブをやってゆこう。こんなバカな事も故いせに考えたものだった。しかし、二年生になって考えてみると、そふらが二年生にとっては一番苦痛な事であることがわかった。又、クラブ内の封建制はあたり前だと。そうでないと統せいがとれないし、今のサラリーマン社会の現実もそうであることだし。皆が平等であるとボールの手入れとか部屋のそうじなどだれもしない。だから一年生は、昔の剣の修業のように、かまたき、マキ割り、ロウカふきをするが如きに、クラ

の身のまわりからしなければならない。又、それが現実にマッチしている。あれほど二年生にたてついた私でも、いざ二年になるとこんな考えまでに変ってしまった。時の流れは偉大なものだ。ハンドボールは私を、家という井戸から、大海である現実社会に視野を発展させてくれた。もし、ハンドボールをやらなかったら現実を知らないまゝ高校時代を過ごしただろう。だから、今の一年生も早くこの事に気がついてほしい。今の一年生は、この事に気がついてほしい。少しけがしたからといって練習を休み、少し練習がきついからといって休ましてくれと。もう少し、ど根じょうを出してもらいたい。私たちの一年生の時は、たゞ先輩にもんくいっていただけで、あんまり練習のきつさについては文句をいわなかった。しかし現実はだん〳〵民主化してきたから、一年生の言う事も一理はあるが。それから、今一つ問題になっているのは、クラブと学校行事についてだが。クラスのために選手として出場するのは結構だが、クラブのある時はクラブをしてほしい。運動クラブのやっている者は、毎日練習しているから、クラブ活動のやっていない人達に、たまに運動させてやったらどうや。クラブ活動をやっている者が、ゆずりの気持をもてるならど小程美しい事か！関係無いかもしれぬが。あんまり偉そうな事ばかり言うが。しかし、現在私は、クラブ活動がどれ程むずかしいものか、特に、ハンドボールクラブは先輩があってよりやりにくいものか。私は現在の主将である鈴木栄太郎君に激励の言葉を託したい。

—ETN—

一年生

誇り と ほこり

一年代表

ハンドボール部に入り最初に感じたことは、部員は少ないが、その少ないもの同志はお互いに「俺達はハンドボール部員である。」という誇りを持っていることである。もちろん、バスケットやその他のクラブ員も各々誇りを持っているだろう。しかし、そこが伝統というのか特に強い印象を受けた。……三年生が引退してからは、急に練習が身体に強くこたえるようになった。合宿以降、夏休みの練習、二学期になってからおよそ一ヶ月半の基礎練習、「休みたい。」、「さぼりたい。」、「やめたい。」このような気持を何回持ったかわからない。しかし、もう十一月「やめたい。」という気持は持っていても、心の底

におさえて、練習するよう心がけたい。以上は個人の考えで、一年全体の考えではないことを、ここに述べておく。

今一番望む事は部員があと一年生二人ぐらいほしいということである。

先輩

Ⓧ Ⓨ 氏

先輩とは奇妙なもので、弱い時には薄情なようだが、一旦強くなりかけるとの戦も盛況となり、アドヴァイスも親切に多くなっていくのを見ると、必ずしもそうとばかりは云えぬらしい。僕も現役時代には、汗水たらして（冬には昇氷をすゝりながら）先輩のなげるボールでキャッチの練習をさせられた。僕達のころは、綜合プレーよりも基本プレーの練習が非常に多かったせいか、どの先輩が来られても、同じようにしんどかった。

考えい二年の中頃から速度記録を作ったりして、その度毎に練習はひどくなり、先輩も数を増していったように思う。先日作られたクラブ名ボを見ると、僕達がしぼられた事のない先輩はほとんど見当らない。合宿と云えば、先輩と現役とがほゞ同数泊ったということも記憶にある。現在では社会の走木となった橋本老人もその頃は合宿といえば、認高校級のダッシュターンを、百本ノックを、と先頭に立っておられた。中学校時代には何もやっていなかった僕がよくその頃たえられたものだと今さらながら感心する。

入学後初練習は山中氏のコーチだった。その翌日だったか、中江氏が修学旅行より帰って来られて、一緒にやったが、小さいのに、どなりちらされて腹を立ててみたが、後イヤむを得ないとさとらされた。西さんの足に、腰にあどろかされたのもあぼえている。

一年の夏には、丸山・津田・山中・広田・橋本氏等、名前をきいただけで身のひきしまるような人のコーチだった。津田さんの集中パスでし

ぼられたのは、人指し指とあや指をつき指ではらし胸をつかってつかまざるを得なかった事で、今でも僕に良い教訓となっている。山中氏のランパスもそのころの名物だった。その頃は、誰ひとり弱音をはくものがいなかったし、田中先生も練習につきぎりだったせいか、明日の事など考えずに、今日に体力を傾注する気持になれ、「ウブ湯」での裸の一時が最大の楽しみでさえあった。

二年の夏だったか榎氏によって制限時間が定められてしまったが〈

体力も付き、一人前にプレーを出来るようになって二年の夏の合宿を迎えたが、これが予想を全くくつがえしてしまった。一日目の早朝のロードワークをやっと終り、一息入れている時、中江氏がトランプをやると云い出し、一日目だし、体力の余力もあったので数人がそれに興じていると、高津ハンドボール部では津田氏と並んで赤鬼と青鬼とたとえられている榎本氏があらわれ、宿舎に顔を出すなり、「おれは元気と見た」とただ一言〈これはあまりにも有名なエピソード〉。そしてその日の朝の練習がはじまった。

中江氏ですら頭の上らぬ両人にしぼられて、「ウブ湯」にめしもくわずにいかされたのがかれこれ七時半、いやはや、もう、あれだけは、今思い出してもぞっとする。その合宿を境にしてハンドボール部が一つのピークを作り上げたのだから面白いものである。プロ野球などで三年計画などとよく云うが、三年制の高校でもやはり、中江氏の時代、石崎氏の時代の猛練習を経て我々があったのだと思うと先輩とは一概に現役の不調をたぶらかすべきではならないと、OB二年生にしてしみじみ〈と分ってきたようである。

高校の運動部では、たぶきびしい練習がよい結果をもたらすものでないと僕は思っている。僕はOBとして自分の経験から〈こ小を押しつけるつもりはない〉きびしい練習も必要だと思うが、現役部員の一人一人がクラブに自負をもち、和気あいあいの内に、もり上りをもつ事こそ、いかに弱くとも、優勝する事に匹敵する部としての大きな勝利だと思う。そしてこの状態においてこそハードトレーニングもでき得るし、又有効なのだと思っている。僕自身としても僕達をすぐれたプレーヤーとして立たせ、優勝までさせてくれ、部としても最高の部に育てあげて下さった先輩諸兄に謝意を表し、またそれに見ならい、出来るだけ長く、OBとして、また大学生として練習にはげみたいと思っている。

―了―

ハンドのラッパ

田中　忠雄

私が初めてハンドボールというものを見たのは中学三年の時テレビで全国大会の決勝戦、明大対日体大の試合だった。その試合でサイドから飛び込んで空中でパスをたきこんだ人の姿を今でも思い出す。私が高校に入学しハンドボールに入ったのは夏休みの練習からだった。何だか不安な気持でいた私をときほぐしてくれたのは渡辺さんだった。今から考えてみると私は丁度高津ハンドボールの第一期黄金時代の頂点の時に入りなんだか一緒に山をおりてしまったような気がする。私の入った時同学年の人では松倉君、前田君、奥田君、谷広君等がいて山口君は盲腸とかで休んでいた時だった。その夏休みの終りに日体予選があり私が最初に我チームの試合を見たのは豊中高校でだった。第一戦はたしか泉大津だったと思う。その時、前半後半分ずつに谷広君と共に出してもらった。その時の気持は情ない事だが、ただ皆にしかられるような失敗だけはしないようにという気持だった。この予選は三年から西原さんや浅野さんも出ていただき、八尾高校での決勝戦、対桜塚戦まで進んだ。（泉津と決勝や決勝等という重要な試合に出させてもらえなかった。今から考えてみて私の一番良かったと記憶に残るのは一年の春の新人大会で決勝戦までいった事だった。あの時は練習している途中で雨が降り、止むと空に二重の虹がかかっており、縁起がよいとたわいのない事を云ったりした。が、結果は日体予選と同じく桜塚に敗れ二位だった。私はバックだったので一度はスワードの横に点を入れてみたいと思っていた。私の夢は室内ハンドボールの時ニ点入れる事ができて果された。スポーツの強いのは「フワイト」と「練習」の一言に尽きると思う。バレーボールの日紡貝塚があれ程強いのも毎日バレーボールに明けくれする生活を送っているからだと思う。しかし私達学生は勉強もあることだから、その練習と勉強という事を調和させることを考えねばならない。と云ってもこの高津では練習しすぎるなんていう事は決して起らないと思う。その点にいささか不満を覚えるが、これも自分の出番がすぎて次の人々に自分の果せなかったムリな夢を

要求しているかもしれない。――――

――終り――

夢中だった現役時代

林　毅

入学して一週間程立ち、中学時代少しかじった野球をやろうかなと考えていた矢先、中学時代の先輩で〝秀才〟であった方々がハンドボール部におられたのでえらい人がやったはるのやから、ええクラブやろうと思って、入ってしまった。体力的には自信があったし、未知のスポーツに対する興味から張り切っていたのだが、うわさにたがわず練習は激しく、毎日〳〵無我夢中で過していた。しかし、日が増すにつれて何に対しても自信がなくなってきて、それに加え、生来の気の弱さも手伝って全く不安であった。特に今でも鮮明に思いだされるのは、六月頃（一年の時）雨で練習が休みになろうとしている時、先輩、津田・榎本両氏が来られ、柔道場で腕立ふせ五十五回余を含めた基礎練習をやって後、土砂降りの雨の中を全員きちんとならんで運動場を十回程走って、体のシンまで冷えきってしまい、ぶる〳〵震えながら家へ帰ったこと。夏季強化合宿のあの〝元気とみた〟宣言に初まる猛練習、倒れた友人をあとにして部屋から運動場へいく時に胸にわく一種独特の感情、僕自身、ぶったおれたり、目の前がまっくらになり芝生のある高台の木陰で頭に水をかけられたりした。全くすごい練習であった。だが上級生の良きリードのもとに、何とかがんばってついていった。おかげで、フォワードの一員として二度の優勝経験ができた。初優勝した当時、本当にうれしくて涙が出そうになったり、夜、決勝戦が思いだされて眠れなかった。二年になり三年が引退して、それまで選手でていた三人を除いて新しい陣容になった。「浅野、西条等が抜けたら高津もこれであかんやろ」と他校のものにいわれたのにはかんぱ、主将であった自分ばかりか他の部員も何クソとファイトを燃した。同じ学年には、名キーパー増田君　攻守に活躍してくれた田中君、小さいながらバックで奮闘、マネージャーをやってくれた渡辺君、眼鏡をかけたクラブ一の秀才、森君　おしゃれで足の速い植村君、ファイト満々の上島君、秀才の井口君や斉藤君、それに土田君などがいた。技術面の不足はチームワークで補おうと練習に励んだ。主将で無理なこともいったが、皆黙ってついてきてくれた。ありが

たかった。結果的にみると、新人大会は一応差で二位、府民体育祭三位で近畿大会に出場した程度に止まった。決して満足のゆく成績ではなかったが一生懸命だったことは確しかである。今でもハンドボールを続けておれることは、高校時代での苦しかった練習のおかげであり、今から考えると先輩のシツタゲキレイと共にありがたいことである。

全日本室内大会を見て

上田 孝

今、テレビで全日本室内ハンドボールを見てきた。テレビに写った最初は愛知紡績対日本体育大学の試合、9対6 愛知紡が勝つ。おめでたい。何故かというと大学現役より実業団が勝ったから。これは女子の部の優勝戦であった。次の男子の決勝は、大崎電機工業対東京芝浦工大、テレビで見たのは12対10で大崎がリード、後残り時間三分でテレビ中継は終ったが恐らく大崎の勝だろう。これは有難い。我高津クラブは芝浦大と数年前に試合をして36対0で敗れたのを憶えている。それ以来私は芝浦大を憎い奴と思ってきた。でも今日の試合を見ているとてもフェアで紳士的である。でも、私は実業団の大崎電機を応援した。自分自身につながるからである。芝浦大が敗れたのはハンドボールを普及させるための手段であるかもしれない。でもスポーツに関する限り、私としてはその様なことを考えたくない。大崎電機工業は実力で優勝したのである。実に立派である。私自身事業に成功してこの様な優秀な地位を持ちたいと常々思っている。我々高津クラブがかって足許にも及ばなかった芝浦が実業団に敗れたのだ。私も必ず成功して優秀なチームを養える様に奉仕する。諸君に頼む。実績において援助の面に於て応援してくれる様に。必ず、ハンドボール界において一派をなしとげてみることを約束する。今年の室内ハンドボール大会で、愛知紡績と大崎電機に優勝の栄冠が上った様に私の事業にもスポーツ面で大きな誇りを持ちたい。ケチな根性じゃなく堂々とやってもらいたい。私が必ず後押しする。

現実に会社には、入って働いている人が親のスネかじりの大学生に勝ったということこそ大いに意義がある。

（1961.12.25）

―終―

女子の部

女子ハンドボール部の誕生

田中　ミヤ

浅野和郎さんから、ナ月始め頃に、此度ハンドボール部高津クラブの「プシ」を作ろうと思うので、何か書くようにとの話がありましたので、クラブの雑誌と思い込んで、校長先生にもそんなつもりで原稿をお願いし、私も前ページのような事を書いたのですが、編輯中に、お手伝いして色々話しをし、他の方々の原稿を読んだりしている内に「プシ」は「部誌」の事で無く「部史」である事を知った次第です。又、浅野さんからの話しだったので、男子のクラブの事と思い込んで書きましたが、女子クラブも合同で作るからもう一度女子の事も書くようにとのお話しですので、再びここに、「女子ハンドボール部創設当時の記憶をたどり、思い出を書く事に致します。

昭和二十九年の末の頃、男子ハンドボール部の人達から、「よその学校では男女クラブがあるのに高津は男子だけで……女子も有れば良いと思いますが、女子のハンドボール部が出来る事を先生はどう思われますか？」と問われ、ハンドボールは起源から言えば、ドイツで女子のスポーツとしてトーアバル（門球）といって始められたものであるから、女子のクラブがある事は望ましい事だと、私の考えを述べますと、「じゃあ先生、女子のハンドボール部を作られたらどうですか」と話しかけられました。「高津のクラブは、教師が作るのが主旨でないでしょう。生徒の中から盛り上って出来るのが、クラブのあり方ではないでしょうか」とそんな問答が取交され、又数日して、「女子のクラブを僕達ではやはり作りにくい。女子の体育を受け持つてる先生にやってもらはないと」とこんなやりとりがそれから何回も繰返されているうちに、何の種目でも器用で、運動好きだが、テニス部をやめていた二年生の徳美恭子さんに、ふとした機会に男子の人からこんな話があるがと話した所、お母さんも「ずっと学生時代バレーボール部で通されたスポーツ一家であるだけに、北野さん等、教人の友達と話し合っているうちに、クラブを作ってやりたくなったようです。」昭和三十年の二月頃から急にクラブ作りの話題が活発になりだしました。同じ頃男子の辻本さんや伍竹さん達が同じ一年生の菊井さん達にこの話しを持ち掛けていたのでトン〳〵拍子に進

みました。自治会のクラブ成立の條件に五名の発起人と顧問があれば成立するからと、私に顧問の依頼がありましたので、お引受け致す事になり、年度の変った四月に生徒の議会及び職員会議で正式に認められるようになりました。この三十年の四月から男女ハンドボール部の顧問を致すことになりました。こうして女子ハンドボール部は産声をあげましたが、クラブが本式に活動を開始した時には発起人の徳美さんや北野さん達は既に三年生で、練習はわずかの間で公式戦に出る機会には恵まれませんでしたが、今宮高校や八尾高校へは応援に来てもらったものでした。菊井さん・吉川さん・石丸さん達は二年生として活躍、一年生に入学した萩原さん・岩瀬さん・波木さん・山口(現在長屋)さん等、四月早々から多数の入部者がありました。この年は皆とても熱心に練習しました。(フィールドハンドボールで男子と同じルールです。)チームワークもとても良く、一・二年生全員で正月の五日に私の家まで尋ねて来られて、にぎやかな一日を過したのも楽しい思い出です。しかしクラブ創設の年ですから戦績は振いませんでしたが、二月初旬の室内大会には初出場で第三位に入賞し、高津女子ハンドボール部の名を大いにあげたものです。

その後学校の方針でクラブ顧問を一人一部になり女子のみの顧問になった年や男女両クラブの係りを二人の先生でした年や男子のみ見て来た年と色々な年を経て今日まで来ました。大阪府下で一番運動クラブ数の多いと言われる高津高校の運動部中最も親しみを感じる私にとって、切り離せないクラブがハンドボール部です。

楽しかった思い出

昭和32年11月3日、一・二年生の男女ハンドボール部全員が、京阪天満に集合して私方へハイキングに行きました。三年生の方には入試前だから勉強をしてもらはねばならないからと何も話さず内證で行きました。(あとでばらして誘ってくれたらと言われました。)

二年生男子の谷口さんは、満員電車の中で薪を持って大弱り。私方からくろんど池まで良く晴れた空の下、賑かに喋りながら歩きました。くろんど池で飯盒炊さん。楽しいスキヤキパーティーをして、その後男女混合の三人づつに分れてボートに乗りました。皆がボートに乗っている間、私だけが池の岸で唯一人荷物の番をしていましたが、この一時間足らずの時間の長かった事、数時間のような気がしました。それでも、とても楽しかった一日です。

―終り―

八類生

雑

恵美　泰子

何の意味もなし　人に勧められるまま、五六人のクラスメイトと練習していたのが部が始まったもとなのです。コーチもなく毎日遊んでいたと云った方がピッタリですね。その部を今日の様な、部史を作るところまで発展したのは、私達より後の方達の力の大きかった事と存じます。

何しろ勉強におわれ、暇をみての練習だったので、2～3度対外試合をしたようにも思いますが、敗けてばかりでした。そのうち私も身体をこわし　ほとんど出なくなり見ている方が多くなって　一年下級の人達がはりきってくれていた事を見い出します。

卒業の年の国体大阪予選に初参加しましたが、身体が弱かったため試合しませんでしたので、試合の思い出はほとんどありません。なにしろ、風の中　ジャンパースカートを男子学生に　一生懸命教えてもらったことぐらいでしょうか？……

―終り―

九類生

女子送球部の道

菊井　清美

部史の発行、合宿等、多方面に活躍中の後輩の人達からの送りに接して、ペンを執ることにしました。

私達のハンドボール部にも、やっと歴史らしいものが綴られつゝあるように思う。

思えば私が初めて送球部の存在を知り、加入した所、ほんの少数の女子が、男子に混ざって走り、跳び、且つ投げていた。その当時、佐竹君という実に親切な人がいて女子部創設に大いに努力を払ってくれた。親しい部の人達の前で、或は各クラブ代表者の面前で、女子部設立の意義や主旨を説き女子部発足を如何に切望！？ 多くの人がこの問題を力説した。他のクラブの各部長が顧問の意見だけに頼らず、あくまでも生徒が主体となり、自主性をもった立派なクラブとなるように応援してくれたのは、今から六年前の春だった様に思う。

今こそ虚心坦懐に述べているが、生まれて初めて右も左も解らぬ運動の世界に飛び込み　やれ部を作ろう、やれ部長になった、さあ部員の勧誘だとよく駆けまわったものだと思う。

設立第二回の試合が、対今宮高校で大差をつけられて敗れたように思う。当時は試合をするのに今の男子と同じ十一人必要で、しゃにむにユニホームを集めるのに苦労した。その時のメンバーは、菊井(1)、平塚(2)、波木(3)、吉川(8)、萩原(7)、松尾(6)、岩瀬(5)、田中(11)、森(10)、マナー、かけひきの帯後をのみ石丸(9)、ムロ(4)であった。試合中にルールや、ユニホームをなく、普通の体操服でがんばった。試合終了後、高島屋の食堂で、田中さや先生に全員みごっていただいたのも懐かしい思い出である。

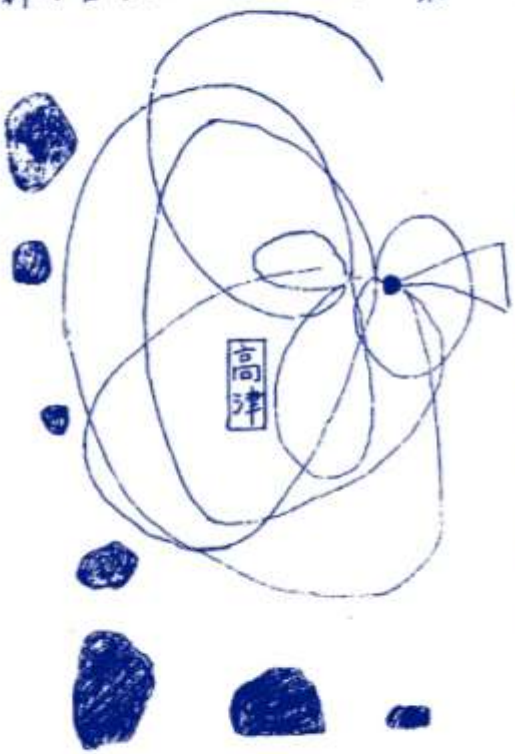
もう一つ田中先生には、部室のない私達に体育館の道具室の大きな箱をいただいた御恩もある。その箱のある部屋に行くのにあみだらに部室といってはいけないと禁じられていたので、部箱に行くと林して集まっては何か食べていたように思う。

初めて分配されたクラブ費で公認ボールを購入し、男子用と女子用はサイズが異なることも発見した。

軌道にのりはじめると、そろそろユニホームを作りたくなるのが人情で、早速いろいろな所から情報を集め、グリーン地で白のカラーでブロードの注文したスタイルは良かったけど、どうも動きにくかった。新ユニホームを着て、体育祭での行進がどうしても晴れがましく、さぞ、さぞ、と思いこいた。

全戦全敗の記録が続いたのは、対八尾高戦で、この時は相手校のレギュラーが、日程変更の為与儀なく不参加してくれたためで、それでも私達はうれしく、次に勝を進めた相手校、梅花学園に勝った時には何か光明がさした様な気がした。部費を決めたり、日誌をつけはじめたのも此の頃で、学校へ行けばハンドボールにしか目がなかった。

そんな日々に訣別を告げて、次部長のバトンを岩瀬さんに渡して卒業した。



十一期生

ジャンプシュートの思い出

井上晴子

私が始めてハンドボールという球技を知ったのは、高校一年の夏藤井寺で開催された国体の準優勝の高校の選手たちが、カード持ちをしていたのが、高校の足利高校のもの珍しさに何となくケールの翻弄されてしまいました。

私もいろいろ見物しているうちに、男性的なスポーツなんだなと思い、大きなボールを持ってみたいと思ったのが、ハンドボール部に入部したのは一年の冬休みだった。

初めての練習の日から、男女混合の練習に参加した。

ユニフォームの使用が許可され、練習もさることながら、ジャンプシュートの練習の初めの一年間は、なかなか先輩部員にはじめてのことばかりで、ボールに触れることもなく、ただ、ボールを持ってみるだけでした

る。ドシャ降りの中で、今宮高校との練習試合の時だったが、あの時自分のシュートを用いて成功して勝った時のうれしさは、三年間のクラブ生活の最高頂だった。

苦しかった思い出

浅野　朝子

思い起こすとハンドボール競技を初めて知ったのは、確か一年の終り頃だったと思います。同じクラスにハンドボール部に所属しているという人がおり、いつも放課後になるとクラブの主たる人物といわれる女性が一二人、日課習に参加するようにとにらみをきかせにやってくる。すると、その度に、彼女はいやな顔をしながらも承知していた。

ある日何となく彼女にハンドボールをどんなことをするのと聞きました。彼女は、日くに、日走り作らボールを投げたり、日くけたりしたりいろいろとらえられないようにご。ボールに投げ込んだりするのを教えてくれました。これが私にとって漠然とハンドボールについての知識を得た最初でした。

（彼女はやめたそうですが）をこうして、クラス対抗の試合があり私もそれに引っぱり出されました。その時のコートは現在男子が行っているフィールド競技だったので、一年生の私達はたゞ廣中で広いグランドを走りまわるだけでした。

試合後、男女クラブの各分二年生の幹部級の人達にクラブへの勧誘で、私達三人程度さんざん追いかけまわされた末、二年生になるにか入部してしまいました。

とすぐにバトンが渡され、新三年生は引退私達三人には必然的に部長等の役が定められ、初めはどうすることも出来なかった。あわてて新入生の勧誘に必死になったが、二三人、ハンドボールというものが他のスポーツに比べて余り知られていなかったこと。新入部員の勧誘が如何にいかに困難であるかが、その立場になって始めて勧誘する人達の苦労がわかり、ふと自分達の頃を思い出し苦笑せずにはいられませんでした。

いう気持は卒業された諸先輩達の思い出される事であり、しもの心に共通して思い出されました。

痛たとなにかく状態で私達の時代には一チームのようにクラブ自体を存続していくだけで精一杯でした。なにしろ二三人の練習が、しばしばでしたから華々しい対外試合等とい うものはでいくら思い出して結ろうとしても浮かんできません。

瞬には雨の中、全く

の、どろんこゲーム。もありました。なつ暑中で、その時の姿といったら今思い出しても、でっとし、赤面する思いです。でも試合の時は自分自身これなりに一生懸命やったつもりです。

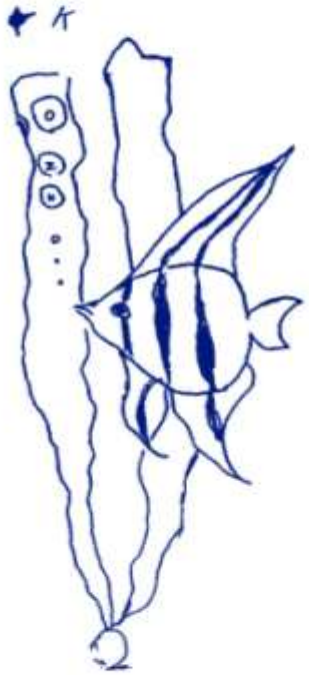
ちょうど私達が活躍している頃からルール面で、女子の場合は長いフィールドを使用せず、室内と同じ大きさのコートに一定し、ジャンプシュートが新しく試み始められました。さっそく練習したものの私達のもづいホームメーションでは得点に結びつかず、先輩のうををやきもきさせたものでした。

これといって何も功績のなかった三・四年前のクラブを通じての自分を思い出しつつ、ペンを走らせていると、全くにも早く経ってしまった歳月、そして勝利の本当の喜びを充分に味わえなかったという腹立たしさで、何か胸にせまるものを感じられずにはおれません。

ロスポーツは参加する事であり勝つ事ではないと言われていますが、参加するからにはよいチームワークで勝利の方向へもって行くことによってみ互の心にフェイトがわき、喜びをわかち合えるのではないでしょうか。でも在学中のほんの少しのクラブ活動ではありましたが、ハンドボールを通じて、自分自身の中に如何なる人とも、チームワークを築く自信がつき多少なりともスポーツ精神といわれるべきものを、あるいは、厳しさの中に人の心のあたたかさというものを身につけ、新たな学生生活の中で誇りを持って、あらゆる人々に接する事が出来、そして今では先輩として、時々母校を訪れ後輩の活躍ぶりを傍観した時には一部になって練習出来る事を喜んでいます。

今後とも、現役・OB・OGは共々に親睦を計り繁展することを期待してやみません。

―終り―



十二期生

ハンドボールで得たもの

安田久美

私がこのクラブに入部したのは一年の時であった。でも、その時一年生の部員が、二、三人しかいなかった為に、よくさぼったのである。こんな事は言い訳にはならないが、何となく練習しにくかった様に思う。今から思うとその時なぜもっと練習しなかったのであろうと悔まれます。でもあつかましくも初出場した時の気持は今だに忘れがたく、新調のユニホームの背番号2が、その時以来、私の愛する数字となりました。私達二年生が主力となった時、コーチとして額田さんを迎へ、一層張り切った気持になったものでした。そして苦しめば苦しむ程、ハンドボールを愛するようになりました。変わる／／指導していただく度に、少しでも強くなりたい、一つでも余計に勝ちたいと、心では思いつつも念願を成しとげずに卒業した事に一まつのさびしさを感じます。夏の暑い直射日光の下で、皆一丸となって、心ゆくまで練習した後の心良さは、運動をしていてよかったとその度に思いました。そうした努力が報われ、強敵豊中高校を一点差ではあれ、勝った時の喜び、スポーツをしている者のみが味わう事のできる快感だと思います。その時は唯もう夢中で走り、投げ、守り、教えていただいた事が使えていたかどうかはこの次に、ファイトだけで頑張り通したものです。部員同志、昔話がはずむ時、あの時は良くやったものだと、しみじみ語るのです。しかし、苦しい思い出ばかりでばありません。自分自身の事になってしまいますが、その時私ばかりでなく千ムにとっても苦しい時だったと思います。私はいつもバックを守ってありましたので、余り攻撃側には加わった事がありませんでした。しかしその時、フォワードの主力が病気、負傷等でつぎ／／と倒れ、ついに私が攻撃側に刈りだされたのです。その時は、とことんまでシュートをしぼられました。その結果ミヤニプシュートを憶える事が出来ましたが、その時はもうしんどくて、わがままではありましたが、フォワードのひっかしさを悟ったものです。その時はまだ自分が倒れるまでやるという気力に欠けていたのは事実ですが、その練習の結果、敗けた試合ではありましたが、初めて、シュートに成功した時は本当に嬉

しいでした。

自分というものをかえりみれば、唯夢中でハンドボールに没頭し、頭を使ってやる事のないものでした。しかし卒業後、合宿生活をしている後輩達をみると、何と恵まれているのであろうと思います。晩にはミーティングする事によって、より詳しくルールを取得し、団結が一層固まり、より良い効果をあげているからです。そして私達も、もっとやれば良かったと思い、生意気にももっと強くなっていたのにと語り合っています。

真冬でも、又、真夏でも、短い袖の練習着を身につけ元気よく運動場に飛び出し、真暗になるまで飛び回ったものです。ハンドボールの試合をみるたびに、練習したいなあと思います。そしてこんな苦しみをにぶべて他の事など何でもない、少し位でへこたれてはいけないと心にいい聞かせます。

最後に、ハンドボールをした事によって、ジャンプシュート等を取得しましたが、しかしそれにも増して、どんな事にもくじけないがまん強い精神がつちかわれた事、チームワークの重要さを理解した事等、これが私の三年間のハンドボールクラブ員としての生活の中で最大の収穫だと思います。

完

十三期生

有意義なハンドボール生活

安村かつる

私は今ハンドボール部に入部した事を深く後悔している。なぜなら、文才のない私にまで原稿を書くようにとの電話がかかってくるから……。隨分ねばったけれど、編集員の熱心さにはとてもかなわないとあきらめた。

自分の高校生活を振り返ってみて、クラブ活動の事を除くと、学校には、毎日ハンドボールをするために通ったようなものである。それほど熱心に練習したにもかかわらず、試合成績のかんばしくなかったことは、まことにもって不思議である。だが、負け惜しみみたいだけれど、弱いチームには、弱いチームなりに強い良さがあるものだ。なんていつも試合に負ける度に皆で話しあったりしたものだ。そしてたまに善戦した時のあの大いなる喜びよ!!

一年生の時だったか、試合の時けつぬに食料を仕入れておいて、試合が終るや着換えもそこそこにして、お弁当その他を云ひて、皆で丸くなって食べたのは、最も楽しい思い出の一つである。今でもそのパクツイ

テイル時の皆の本当にうれしそうな顔や、大きくあけた口をはっきり思い出す事ができる。（まず食物の話で申し訳ない。）

女子ハンドで合宿を始めたのは、私達の代からですが、その時は何分初めての事なので先輩の方々に随分御迷惑をかけた事と思う。一回目の合宿の時は、遊ぶものまで持ってくる事に気が付かなかったので、先輩のオがトランプを持って来て下さった時はうれしかった。皆、覚えたての〝ナポレオン〟に熱中してしまって、食事前のちょっとした時間や、洗濯の合間など寸暇を惜しんで、トランプをしたこともあった。真夏のカン〈照りの中での練習はすぐのどがカラ〈になってしまう。練習が終るやいなや水道目がけて突進する。そのお水のおいしい事〃〃。このおいしい水を飲むために、次の日もシンドイ練習に参加する。思い出すと楽しかったような気がする合宿も考えてみると、最後の日に近づくと足が動かなくなったりしたし、練習も一つ〈考えてみるとシンドかったことばかりだけれど、それでもなをクラブ活動を思い出す時楽しくなるのは、何もハンドボールが楽しいのでなく、ハンドボールによって固く結ばれた友情によるものではないでしょうか。その、より強固な友情をつくり出すためにも、やはり練習は厳しいものでなくてはならないし、初めにヤセガマンを言ったけれど、やはりクラブは強い方が良い。後輩の皆さん、どうか頑張って強いチームを作って下さい。（そのためにも、こんな部史をつくる暇を、練習に回して下さったら私の方も助かったのですが……）

我々女子の先輩陣も、今後出来る限り、老体にムチ打って練習に参加したいと思っています。とにかくこれで、何個か文字を並べることが出来、編集員に対する面目もほどこしたようですので、最初の〝入部し後悔している〟という所を取り消し、やっぱり〝ハンドボールをして良かった〟ということで筆を置きます。

完

三年生

戦績

久保田順子

大阪府ブロック新人リーグ戦
35.11.15 於豊中高グランド
高津4－3西淀女
高津6－1豊中
大阪府ブロック婦人リーグ戦
35.11.22 於枚方川グランド
博愛 ○ 来住
枚方川

大阪豊中選手権大会
35.12.22 於府立体育館
高津1－5枚方川

第7回高槻新人大会
35.2.7 於高槻高グランド
高津2－7岸和田

地区別ソフトバレー大会
35.4.28 於高津高グランド
高津2－1中原
高津2－1春日丘
女子高に不戦勝

府民大会
35.5.3 於高津高グランド
高津2－8大谷

全日本大阪予選
35.6.13 於大谷高グランド
高津5－1風
高津4－7豊中

国体予選
35.9.16 於三国丘高グランド
高津5－14岸和田

地区別新人リーグ戦
35.11.26 於枚方川グランド
高津1－17枚方川
高津1－2春日丘
女子高に不戦勝

大阪豊中選手権大会
35.1.16 於府立体育館
高津2－9八尾

新人大会
35.2.5 於高津高グランド
高津6－2住吉学園
高津3－12大谷

府民大会予選
35.4.29 於枚方川グランド
高津1－5春日丘
高津4－3女子高

全日本大阪予選
35.5.26 於三国丘高グランド
高津5－6三国丘高

クラブで得た事

藤原　芽子

クラブに入った動機といえば、人数が足りないと言う事からである。最初はなれぬ重労働に涙も流れ、本当にやめようと思う時は幾度もあった。でも皆の友情に支えられて、その危機を乗り越え今日にまで及んだ。その間に於ける私の経験は本当に貴重なもので、高校生としての経験から人間問題まで考えるようになった。そうしてその経験を述べる事にしよう。

誰しもが感じる試合の第一印象として、自分の力の限界というものを目の前で示された。自分がどんなに未熟で人並に及ばない事か。そうしてもっと〈練習しなければならないという事である。あやふやな気持でいてはだめだ、もっとしっかりとしなくては……。その日から私はハンドボールマンになったのである。

又、今までの試合に於ては、チームには信頼しあうという事が最も大切だという事だ。信頼しあうところにチームが一つと成り、又個々のプレーも、充分にそのものが発揮できるようになるのだ。そう知った私達のチームは、今でも大きなつながりとなっていると私は思う。

一方、クラブ内部に於ては友達の有難さ、という点に身をもって感じ得た。それは丁度ジャンプシュートができかかってきた、その日に、私はガラスで足を切った。その時の皆の態度は、私の方が気の毒にと思うほどやってくれた。その時ほどクラブに入っているうれしさというものを痛切に感じた事はなかった。それによって友情とはこんなものだなあと知った。

以上は、私のクラブ生活二年に於て得た私にとっての最大の経験である。こういうこともハンドボールクラブ内の歴史の中の低迷を流れている一つとして記す。

卒業にあたって

佐藤　順子

中学時代、いろんなクラブに入り少しづつかじってきたせいか卒業してしまうと何をやってたのかさっぱりピンと来ません。運動クラブでは卓球、文化クラブではコーラス部が深く印象に残っている位です。クラブに熱中しなかったから勉強を一生懸命したのかと思われますが、そんな覚えもなく一瞬のうちに中学時代をすごしてしまいました。

私は姉の念願通り高津高校に入学できました。でも姉には、私の背広姿を見せる事が出来ませんでした。幼い頃の高津高校の印象に戻って、自由をモットーとするすばらしい学校でしたので、やっぱり高津に来てよかったと思っています。最初の頃は勉強しかすることのなかった私ですが、一年の中頃からはハンドボールが私の日課となり、明けても暮れてもハンドボールをやって来ました。学校の帰りが遅いと何度かぼられましたけれど、運動でもして丈夫にならなければと言ったのが母でしたので、思う存分クラブをやって来ました。技術的には余り上達していませんが、そんな事よりも、もっと大事なものをクラブから身につけた事が最大の収穫だったと言えるでしょう。それは同じハンドボールをやってる方ならおわかりと思いますので今さら取り上げないでおきましょう。一般にスポーツを解する者に悪人はいない一言われますが、正にその通りだと思います。私などはまだ――解する所までは行きません。大学に入りハンドボールを続けられたら、これ以上の喜こばしい事はありませんね。でも、就職の決ってしまっている今となってはどうしようもありませんが、

やれる機会があれば、もっと――練習して、心身共に洗練されたものにしたいと思っております。そして立派な一女性に……。社会に出てから、誰かに高校時代の事を聞かれたら、私はまず最初にハンドボール部の話をするでしょう。大いに誇りを持って。その時のためにといっては変ですが、そ三思い出を綴ってみようと思います。

入部して以来、キーパーがやっと板について来た頃、四月から五月にかけてのプロック大会兼府民大会予選に出場した時の事です。メンバーは、二年生に石崎さん、安村さん、三砂さん、林さんの四人、一年生に坂口、大石、久保田、小早川、佐々見、佐藤の六人の計十人という申し分のないメンバーをフルに活躍させて、宿敵寝屋川には及びませんでしたが、春日丘と大阪女子商業に勝ち、府民大会の出場権を得ました。府民大会では惜しくも大谷高校にやられましたが、出場できただけで大変うれしかった。それも本校グランドで行われたのですから事更です。その日の後で寝屋川と練習試合をして3―1で勝った事も忘れてはならないでしょう。

春が過ぎ夏が訪れると合宿の事を思い出します。二年の夏の合宿は春と違って頭の

楽い合宿でした。人数は、三人（次は　小早川
久保田　佐々見　京谷　佐藤）ッなかっ
たけれどもがんばりに、人で一致団結して見
様ある合宿を一週間を過せたことは、大
変有意義な事でした。人数が少なくて練習
にこたえ苦しかったが、休憩時間に家庭科
室の横でぶっ倒れて涼風とし〳〵味わ
たのも忘れられません。苦しいばかりでは
なく、第一日目、前の晩遅寝で小久保先生
や衛藤先生、それも中江さんを交えた雑談
それに電話の事も　今でも思い出すと小
き出します。二日目からは、二人の教室で
したが、有り練習にもめげず夜は楽で、男
子の夫婦を交えてトランプをしたり、恋愛
いをしたりして充分楽しかった。キャプ
としての思い出はそれ程にして、フォワー
ドに変ってからの事を書こうと思うのです
が、三年になってやり始めて試合経験もウ
いし、フォワード一年生が、律そうなことを
をくのし何でもこのがいめます。
これからのハンドボールの隆盛を祈り、
高津ハンドボール部の活躍を期待しつつ……。

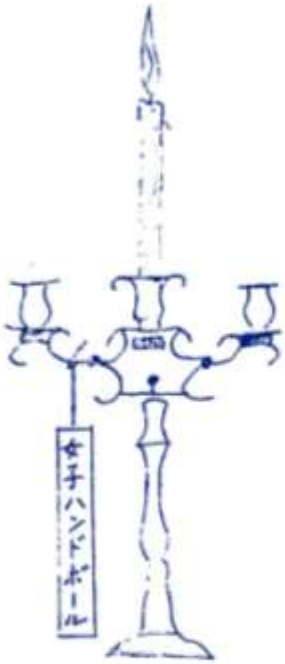
完

私のクラブ生活

佐々見淑子

私がハンドボール部に入部したのは、一年生の二学期も終りに近い十二月だった。その頃は一学期や、二学期の始めとは違って、何か運動クラブに入って、派手に暴れたいという強い欲望も、幾分薄れ、それ迄たちこちらのクラブを転々としてきていたずらに、慎重に、今度こそ落着けるクラブに入りたいという願いも強かった。当時ハンドボール部は部員が他の女子運動クラブに比して少なく、又、一応校内大会という競技を通して、勧誘された私であった為か、待遇も良かったし、又ハンドボールというスポーツ自体の持つスケールの大きさに惹せられて　練習は厳しかったけれど、さ程苦にはならなかった。それでも、入って日の浅い頃は、熱心な二年生の人達を見ると、つい、よくまあ、飽きもせんとかボランと、練習しはるなあ、よっぽど、暇やネ、ネンナ、と思った程、私にとって、クラブ活動は、意味を持たなかったのである。今から思うと、クラブというものを、面白く楽しむ為のもの、と理解していたそれ迄の　クラブ活動に対する根本的な思い違い

が、私をそれ迄、どのクラブにも、細主せなかったのであろうと思う。一年の三学期頃から、二年生にかけては、私にとって、ハンドボールは、遊びごとではなかった。明けても暮れても、クラブ活動が、私のすべてであり、いきがいであった。しかし、そんな夢中の状態ばかりし続かなかった。と言うのは、私のそんな我夢ショウの気持に比して、技術の方は、あの期間を過ぎてもきうと、一向に、伸びてくれないのである。毎日、練習してるにもかゝわらず、ジャンプシュートは、依然として、カが入らないし、フォワードの命である、ホーメーションの動は仍らかけかった。そして先輩にも、当然の事だが、「キーパーと代れ！」と、言われて、又、我作ら、自分の能力の限界を感じて、涙を流した事も、しばしばだった。しかし、その頃になると、合宿や練習を通じての友人関係や、又クラブを通じて起る精神的な問題等に、「て色々と真剣に考えた。人間、霊魂つき果てると、本来のその人の性格の有りの尽か、表われるものである。合宿を通じて、又、苦しい練習を通じて得た友人が、私には、一生の友となる様に思えてならない。合宿の夜、ボソボソと遅く迄、恋愛論を語ったり、又、早く寝ついた者の、寝言に、耳を澄ましてクスクス笑ったり、忘れられない思い出が、「う」として広がる。夏の合宿では暑いさい中に、水も飲めず、ノドがカラカラにいかりなって、それでもホーメーションは手加減されず、又、又走りに走って涙が出る思いをした事も有った。又練習の後ゴロゴロと高台に仰向けに寝ころび、空を見る。どこ迄も、澄みきった青空に、白い雲が、ユックリと流れ、木々の緑が目にしみる。そんな時、暫く忘れている自然の美しさに、あ然としてしまう。考えてみると、クラブ活動と共に、私の高校生活は、広がって来た様である。急激一本にしぼらずに、クラブに入って、苦しみ、楽しみ、暴れ、私の若いエネルギーを、思いっきり、発散させ、高校生活を意義有る、ものにしたという事だけでなく、短い、クラブ生活では有ったけれども、以後の私にとっても、多いに、プラスになるものと、信じて疑わない。



二年生

ハンドボールと私

西尾千洋

一年生の終りも近い二月の初旬だった。その頃の私は、バカ程見いるんでバレーボールをしていた。とにかくバレーボールであった。健康手帖のクラブ名の欄が一年、二年、三年と別々にされているのを見て、こんなもん、一つで結構やわ、と三つも別々なことは書くなんてこと、自分はどの欄に体に信じられなかったし、自分はどの欄にも母子バレーボールクラブと太ラリと並ぶことを、ある満足を持って確信していた。そんなあるほど、友人の絶大なる歌めによって他のスポーツを見るのも、又楽しいと言うような長分で友人と訪独日本選抜チームとの試合を見に行った。大阪地区選抜チームとの試合を見に行った。元来、熱しやすい性質なのかも知れないけれども、80近くも熱を上げてしまったのだから、何でも見たら素晴らしいと思うのだから、毎度のことであっただろうに……！。それから二週間程後に校内ハンドボール大会があって、選ばれた、皆、とても親しくしていた子ばかりだったから、ワァ〜と言って走りまわった。ところが又、その時の成績が三対三で引き分け！　七米スロー三本づつの七米スローでとう〜〜一対〇で敗けてしまった。このセ米スローはスッたのだが、ボイントオーバー等というものを取られてしまったのだ。その海やレさ？とスピードに感ヘの違れとで、今まで何にもゆらなかったハンドが、何かスきくゝの中にマークされて来た。スピードに感、行動範囲の大きさに驚せられて、スポーツはバレーボールに外に考えられなかった私が、ハンドをレたい等と考え出ンてしまった。

中学からずっとして来たバレーボールだった。今も続いている中学時代の友との友情は、言わばバレーボールで結ばれた友情であった。三人共、各々違った学校だったけれども中レ会わせたようにバレーボールクラブに入部した。そして、お互いに結りと希望を持っていました。それに、私は末默だったけれども、「L」というポジションを末もらっていた。そしてニ月と言えば、そろそろ一年生に主体が置かれかけていた。そんな時にバレーボールをやめると宣言したのだ。レかもただやめるのではなく、バンドへスりたい、とまで……。今から思えば、よくあんな事を言ったものだと思う。どうかしていたのだと思う。余りに自分勝手すぎて、自分ながら、自分のレた事と思え

ないくらいなのだ。当然のことだが、一年生はもとより二年生の人には特に非難された。丁度、テストの中であったにもかかわらず部会が開かれ、先輩、コーチにもいろいろ当然の非難を受けた。部員の誰もが、一年生に主体が移っていって、っている間で、ポジションをもらっていて、しかも、その後にスタメンを出すべき人が一人もいないということがわかっているのに、ハンドをしたいから勝ちたいという理由でやめるなんて、そんな馬鹿な事は考えられることと思っていなかったと思う。だから、私が、テスト最後の日の部会に、先輩にもコーチにももう一度頼みに行ったのにやっぱり、やめたいと思いますと言った時には、皆あきれただろうン、多分兄貴もごんぱるならもういいんと思われただろうと思う。友人達は、ペレーよりまっと上手になれるのですか！ポジションを捨ててまで、ハンドをやりたいのですか？ときいてきた。あの時は、それ程までに強い気持になれたのだろうか？。神経がどこかおかしくなっていたのだと思う。とにかく、それから今まで、ペレーの人達には、すまなさとある気まずさを持ったままハンドボールをしてきた。マ、二年生から始めたということで、いろいろ絶レいろいろ言われたことも多かった。

あんなにまで熱ぎ？を恋してやって来たハンドボールを、もうある事情で今までとおりしていけない時を目の前にして、今までやって来た事を無駄にしてやめてから、今までの物をやって来たのかと思うと、残念な事に、情けないけれども、私は悲しらざるを得ない。ほんとに短かいこの期間の意義を一生懸命考えてみる。ペレーより、上手になれたろうか！でも一つはっきりと言おう。自分を誇ってもおう。ハンドボールをしている時は、すごく楽しかった。そして、突然、その私については私は決してはやんでいけないことを……。

感じたまま

門田真弓

ハンドボールというものについて何に教いとか、むづかしいとかいう事は全然思わないで入った。たゞスピードとかいフットの中で思う存分出来るという事にあこがれて。一かーやってみて知ったのは、私達が考えていたような生やさしいものでないということです。本当にやりがいがあって、入部した事を喜んでいます。まだ全然といっていい程何も満足に出来ないのであるが、毎日練習するだけで楽しい。大

体の人はそうであると思うが、私達も高校に行って初めてハンドを知りました。入部して一年、今までは上級生について行けば良かったのだし、楽でもあったし、でも三年が引退し、私達が上になった今、どうして一年生を引っぱって行くかということについて不安で仕方ない。どうして私は人に頼る気ばかり多いのかと思うと我ながら腹が立つ。クラブを思っているだけに、もうすぐある理由でやめねばならないのが残念ですが、これから先のクラブが、部員が少ない上に又減るとどうなることか心配である。どうしたらよいのか見当がつかないで、思案中です。私にも責任感はありますだから、この問題を解決しないでは、やめるにやめられません。

私達三人同じ、悪は入部した時期は違っても短期間であることは同じです。この短期間のクラブ生活をふりかえってみて、反省とか不満、希望を書いてみます。

練習内容について

一、フォーメーション

練習の時一年は大体バックであるが、新米の我々もフォーメーションを教えてほしい

一、対人パスがたすぎる。

一、ランキャッチの時のアゲインをやめて一人五本ずつ位にするとよい

一、ジャンプシュートばかりでなく、ロング、スタンディングシュートももっと練習せねばならない、シュートノックはよい練習方法に思う。

一、冬の寒い時、キーパーだけで行く省エネをはじめてする方がより良い。

一、夏の練習は出来るべく木陰でやれば、太陽の真中でやるよりもっと厳しく効果的な練習が出来ると思う。

試合クラブについて

一、作戦が少し高級で細かすぎるのでは行いか。もっと荒い作戦を練るとよい。

一、負けと分しすぎること。もっと反則して、反則勝ち程に行かないと高津は体力負けする。試合経験を重ねて感を養わねばならない。

以上ですが、私達の部合のいい事ばかり述べたてまして申し訳ないがざっとこんなものです。クラブをやめてから今も女子ハンドボール部を長い目で見守って行こうと思っています。

一年生

入部して

南部清子

クラブに入、こと一月経過したが未知のハンドボールと言う名にあこがれを抱いて、先輩の練習風景を見て行かねばの思いを胸中で、分らぬ事ばかりの最初の日の練習は、見慣れぬ娘ばかりの中で、肩が重くなる思いがした。

今後別クラブの練習に行く限り気の合わぬ娘ばかりつどうこの長い練習が大変で、とても耐えられぬ気がしてならない。

参加しつづけるかどうかの練習ばかりの中で、何とかして早く終る事を願う毎日である。

先輩の励ましがあってドシドシ練習しなければ、と思うのだが、何分早く終る事を願う毎日である。

習してカラダもカルくなる。なかなか人だかりの中で、なかなか思うようにはいかない。

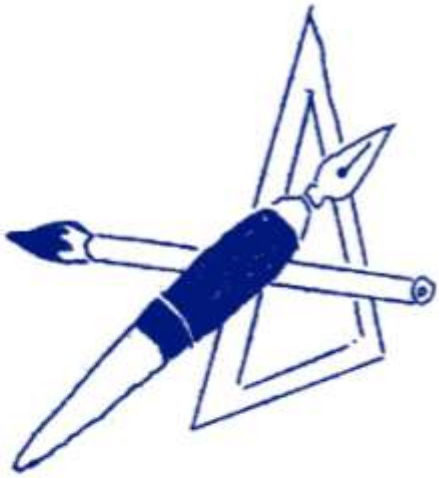
ほんとうにこの練習をつづけるべきか、一日一日と終わってかゆくなる。

したもの、だから、一人二人と居なくなり、残念ながら、今年度の部員が減り、人数が減り、部員が減り、部員が減り、部員

クラブに入って

木下　保美

中学の頃は、運動クラブに入っていなかったので、高校に入ったらバスケットなどをしてもっと背が伸びたいと思っていたが、運動部にこられたのはハンドボールなどでいわゆる球技は何もしらなかったことも多く、ボールなどとはいってもとてもしたことがなかったので、不安とちょっとしたあこがれを抱いて、練習をしてみると、自信を最初から激しくて、机のまえに着くと疲れが出て寝てしまうことが多い。最近は決意を固めたのれしさに起きてみるやいなや、ばたばたとうすぐ朝ごはんを食べて、学校へ行くまでの時間は、ハンドボールの練習をしてみたいと思っていたが、部員が現在二十人あまりいるので、部員の中の一部の人だけしか、試合に出られないのは、残念だと思う。しかし、部員全員が、試合に出られるようになるまで、私も早く試合に出られるようになるまで、がんばりたい。



出し合ってした戦の集中力、調子がよいが、らと思っても、個の力を超越したものがあるると思う。個人が集る時こんな美しい事はないと思う。個人が練習しても取り得たものだけしかないのだから。一致団結、皆の力を出し合ってした時、初めて勝利が得られるだろう。

編集後記

此の一冊を作成するにあたり先ず困惑したのは、題を〝高津クラブ史〟にしようか〝高津クラブ誌〟にしようかということであった。編集者の不徹底のために原稿の中には〝史〟とした人も〝誌〟とした人もあったようだが、根本的には異義のあるはずもなく、唯今後再び此のような企画を期待する意味で〝高津クラブ誌〟としておいた。企画以来約三〝月半のガリ版刷りの結果、やっと冊子らしい体裁を整えて来たが、原稿集めから印刷まで田中先生や現役諸君、並びに林・井口君等、年末の忙しさの中を連日御奉仕を願って、やっとここまでこぎつけた次第です。なにしろ素人ばかりそその上原稿の集まりが不定期で、予定が狂ったこともしばしばで出来上りは、決して整ったものとはいえないようだ。しかし、此の冊子は、思わぬ所から高津クラブの隠れた一端を発見したり、又、あまり知られなかった中学校時代のことが、小西先生などの寄稿により明確になったりして読者諸兄に、懐しさを感ぜしむるに十分のものをもっていると確信している。顧わくばこの冊子が、従来云われたOB会・OG会の縦のつながりの疎なる点を、親しい緊密なものにする一助となればと祈っている。尚、今回の部誌は、資金の関係もありお粗末なものとなったが、ゆく〳〵は、専門の印刷所に依頼し、寄稿者も特定の人に限らず、より多数の人に寄稿していただけるようになることを願って止まない。其の折には、文才があるなしにかかわらず、又、部生活の長短にかかわらず、せめて読者の現況なりともお寄せ載きたい。

高津クラブ
ハンドボール部誌
昭和37年1月発行
編集
高津ハンドボールクラブ
部誌作成委員会
発行　高津ハンドボールクラブ
プリント　高津高校
非売品

部誌

復刻版の制作について

昭和三十六年十一月、高津ハンドボールクラブが大阪総合選手権で初優勝した記念の**部誌**を復刻しました。当時の山川校長、田中顧問、中学二十二期 小西、**男子部**：三期 橋本、佐々木、五期 額田、上田、渡辺、六期 山中、七期 松田、八期 西田、九期 佐竹、辻本、十期 中江、十一期 石崎、十二期 浅野、十三期 林、渡辺、井口、斎藤、十四期 松倉、前田、田中、十五期 松村、鈴木、西本、十六期代表、**女子部**：八期 徳美、九期 菊井、十一期 井上、浅野、十二期 安田、十三期 安村、十四期 久保田、藤原、佐藤、佐々見、十五期 西屋、門田、十六期 南部、木下（敬称略）の寄稿が掲載された**部誌**は、五十年間、高津高校同窓会(記念)館一階会議室のガラスケースに資料として展示されていました。しかし、藁半紙にガリ版刷りで傷みが激しく、平成二十三年一月、劣化防止のため、原文書からホッチキス針を取り除き、原紙を一枚ずつクリアファイルに入れてバインダーに綴じて保管する作業を行いました。その際、原紙をスキャンしたデジタル画像データを取得し、下地等のノイズを除去する処理をしたレプリカを作成しました。このレプリカを、平成二十三年七月、高津高校ハンドボール部ＯＢ・ＯＧ総会で回覧した結果、希望者に配布することになり、この復刻版を制作しました。

平成二十四年七月

ハンドボール部ＯＢ・ＯＧ会　副会長　中野元博(二十六期)